

令和4年度 長期教育研究員

# 研究報告集録

第51号

はしがき

<こども園 健康>

- 進んで多様な動きを楽しむ幼児の育成  
－ 互いのイメージを共有する戸外遊びの環境構成と援助の工夫 －

浦添市立当山こども園  
國場 こそえ

<小学校 特別活動>

- 互いのよさを生かして合意形成を図る児童の育成  
－ 事前の活動の充実と多様な意見の可視化を工夫した話し合い活動を通して －

浦添市立内間小学校  
末吉 増樹

<中学校 英語>

- 主体的に英語で考えや気持ちを伝え合う生徒の育成  
－ 目的や場面、状況等に応じた「話すこと[やり取り]」の指導の工夫を通して －

浦添市立神森中学校  
根間 こそえ

<自立支援>

- 不登校児童生徒の安全・安心な居場所を作り出す取組  
－ 自立支援室「ひなた」の事例を通して －

浦添市立牧港小学校  
赤嶺 達也

<適応指導>

- 社会的自立を目指した適応指導教室の指導・支援の在り方  
－ プレイセラピー的小集団活動と支援シートの活用を通して －

浦添市立浦添中学校  
大城 研

令和5年3月

浦添市立教育研究所

## は し が き

コロナ禍により、当たり前の日常生活の多くが失われている状況から、今年度は「with コロナ」のもと、徐々に以前の生活様式を取り戻しつつあります。

学校教育においては、子ども達の安心・安全を確保しつつ新たな日常の過ごし方や学び方を模索する状況が続いています。その中でも ICT 活用においては、オンラインによる集会や研修が行われたり、タブレット端末と電子黒板というICT 機器が新たな学習ツールとして日常的に活用されたりして、学校の学びの風景が大きく変化してきました。

このような状況下、令和4年度長期教育研究員の研修事業の成果として、研究報告書を発刊する運びとなりました。これまで本研修事業を通して、学校教育の充実に資する人材育成に努めてきており、今年度第 51 期を迎え、幼稚園・こども園 46 名、小学校 109 名、中学校 66 名の計 221 名が研修を終えることとなります。また、特別研究員研修事業として平成 2 年から 25 名が研修を終えており、授業づくりや教育活動に対する多くの提案を行っています。

今年度の長期教育研究員研修を振り返ってみますと、10 月から半年間の研修がスタートしました。それまでに5回の事前研修が行われ、「研修の心得」や「研究論文の書き方」等、基本的なことを確認することで、その後のスムーズな研修へとつなぐことができました。12 月には園・学校での検証授業を行い、幼児・児童生徒と対話等を大切にしながら実践的研究を進めることができました。そこで、3名の研究内容の一端を紹介します。

**國場こずえ研究員**は、コロナ禍等により室内で過ごすことが多くなり運動不足傾向の幼児に対して、戸外遊びを通して「進んで多様な動きを楽しむ」ために、幼児のイメージを大切にしたい遊びの研究に挑戦しました。**末吉増樹研究員**は、複雑多様化する社会集団において、お互いがよりよく過ごすための最も基本となる「話し合い活動」の中で、折り合いをつけて「合意形成」を図るための手順や根拠の持たせ方等を研究し、提案してくれました。**根間こずえ研究員**は、英語によるコミュニケーションが益々進展する社会において、「目的や場面・状況等」に応じて「自分の考えや思いを伝える経験を積むこと」が英語の学びには大切であるという理念の下、研究を進めてくれました。

また特別研究員研修においては、自立支援室「ひなた」の**赤嶺達也研究員**は、不登校児童生徒の「安全・安心な居場所」づくりについて「ひなた」の児童生徒の事例から根拠となる要因について追求してくれました。適応指導教室「いまあじ」の**大城研研究員**は、不登校児童生徒への「プレイセラピー的小集団活動」を通して、安全・安心を確保しつつ自己の振り返りや考えの変容を促し、社会的自立を目指した研究を提案してくれました。

5名の研究員には、学校教育における今日的課題に理論と実践の両面から真摯に研究に取り組んで頂きました。今後、本研究所で得た成果を学校現場で仲間と共有しつつ、各学校における日々の教育実践に役立てることを願っております。

結びになりますが、本研修事業にご理解を頂き、検証授業等ではご支援・ご協力を賜りました研究員の所属校の校長先生をはじめ諸先生方、さらには本研修に対し、ご指導・ご助言を賜りました関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

令和5年3月

浦添市立教育研究所

所長 田中 浩三

# 目次

はしがき

<こども園 健康> . . . . .	1
● 進んで多様な動きを楽しむ幼児の育成	
－ 互いのイメージを共有する戸外遊びの環境構成と援助の工夫 －	
	浦添市立当山こども園 國場 こそえ
<小学校 特別活動> . . . . .	17
● 互いのよさを生かして合意形成を図る児童の育成	
－ 事前の活動の充実と多様な意見の可視化を工夫した話し合い活動を通して －	
	浦添市立内間小学校 末吉 増樹
<中学校 英語> . . . . .	33
● 主体的に英語で考えや気持ちを伝え合う生徒の育成	
－ 目的や場面、状況等に応じた「話すこと[やり取り]」の指導の工夫を通して －	
	浦添市立神森中学校 根間 こそえ
<自立支援> . . . . .	49
● 不登校児童生徒の安全・安心な居場所を作り出す取組	
－ 自立支援室「ひなた」の事例を通して －	
	浦添市立牧港小学校 赤嶺 達也
<適応指導> . . . . .	57
● 社会的自立を目指した適応指導教室の指導・支援の在り方	
－ プレイセラピー的小集団活動と支援シートの活用を通して －	
	浦添市立浦添中学校 大城 研

〈こども園 健康〉

## 進んで多様な動きを楽しむ幼児の育成

— 互いのイメージを共有する戸外遊びの環境構成と援助の工夫 —



浦添市立 当山こども園 國場こずえ



# 目次



I	テーマ設定理由	1
II	目指す子ども像	2
III	研究の目標	2
IV	研究仮説	
1	基本仮説	2
2	作業仮説	2
V	研究構想図	2
VI	研究内容	
1	幼児期の運動について	3
2	多様な動きについて	4
3	環境構成について	4～5
4	援助の工夫について	5～6
VII	保育実践	
1	検証保育の全体計画	7
2	検証保育	7～8
3	本時の保育実践	9～10
VIII	研究の考察	
1	作業仮説(1)の検証	11～13
2	作業仮説(2)の検証	14～16
3	本研究を通して	16
IX	研究の成果と課題	
1	成果	16
2	課題	16
	主な参考・引用文献	16

## 進んで多様な動きを楽しむ幼児の育成

### —互いのイメージを共有する戸外遊びの環境構成と援助の工夫—

浦添市立当山こども園 國場 こずえ

#### 【要約】

本研究は、幼児が戸外遊びにおいて友達とイメージを共有して遊ぶことができる環境構成と援助の工夫を行うことで、多様な動きを経験することができるように目指したものである。

キーワード □多様な動き □イメージを共有する遊び □戸外遊び □主体的な遊び

#### I テーマ設定の理由

高度情報化や科学技術の進展により、幼児を取り巻く環境は大きく変化している。また、新型コロナウイルスの感染拡大により幼児の生活様式は、室内で過ごす時間が増え、思い切り体を動かす機会が減少した。このことは、運動不足を引き起こし、幼児の身体諸機能の発達に少なからず影響していると考えられる。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(H30,以降,教育・保育要領)では、領域「健康」において、幼児期は身体諸機能が著しく発達する時期であり、幼児の興味や能力などに応じたいろいろな遊びの中で十分に体を動かすことが大切だとされている。また、戸外に出て遊ぶことで、全身を思い切り使ったり、自然環境に触れたりすることができることから、戸外遊びの必要性についても述べられている。

また、幼児期運動指針(2012)では、幼児期に様々な遊びの中で多様な動きを経験し、基本的な動きを身に付けていくことは、生涯の健康を維持する上で大切な基盤となることが示されている。そのため、保育教諭等は、幼児が特定の遊びに偏ることなく、自発的に様々な遊びを楽しめるよう工夫することが求められている。

本学級の幼児の実態として、新型コロナウイルスの感染拡大により、家庭でゲームや動画視聴をして遊ぶ時間が増え、戸外に出て体を動かして遊ぶ時間が減ったという保護者の声があった。そのような幼児の中には、戸外に出て遊ぶことより室内遊びを好み、運動遊びにも意欲的でない子がいる。一方で、進んで戸外に出て遊ぶ子や運動遊びが得意な子もいるが、興味の

ない遊びにはあまり関わろうとせず、特定の遊びに偏っている姿が見られる。

これまでの保育実践を振り返ってみると、戸外で体を動かす遊びにおいて、竹馬、フラフープ、なわとび等、特定の運動遊びを保育教諭が設定することが多かったように思う。そこでは、幼児が自発的に様々な遊びを楽しむという環境構成の工夫が充分でなかった。戸外で幼児が多様な動きを経験するためには、戸外ならではの環境を生かし、様々な遊びの環境を作ることが大切だと考える。さらに、幼児が戸外での様々な遊びに主体的に関わるように幼児の興味関心に沿った遊びを工夫することが必要だと思われる。

本学級の幼児は、友達と室内でマットや椅子をつなげて家に見立てて遊んだり、ブロックを友達と協力して組み立てたりと、友達とイメージを共有して遊ぶことが好きである。そこで、戸外でもいろいろな道具や素材を準備し、それらを使って友達とイメージを共有して遊ぶことができるようにすることで、友達と様々な遊びを楽しみ、進んで戸外で体を動かすことができるのではないかと考える。さらに、遊びを振り返る時間を設け、幼児一人一人の遊びの様子や、体の動きの実態を把握し、幼児理解に基づいた援助を工夫することで友達とイメージを共有して戸外遊びを楽しみ、多様な動きを経験することができるのではないかと考える。

そこで、本研究では、幼児が友達と互いのイメージを共有する戸外遊びの環境構成や援助を工夫することで、進んで多様な動きを楽しむ幼児を育成したいと考え、本テーマを設定した。

## II めざす子ども像

戸外での遊びを友達と楽しみ、いろいろな体の動きを経験することで、健やかに育つ幼児

## III 研究の目標

幼児が、友達と互いのイメージを共有して様々な遊びをする中で、進んで多様な動きを楽しむことができるよう、戸外遊びの環境構成や援助について研究する。

## IV 研究仮説

### 1 基本仮説

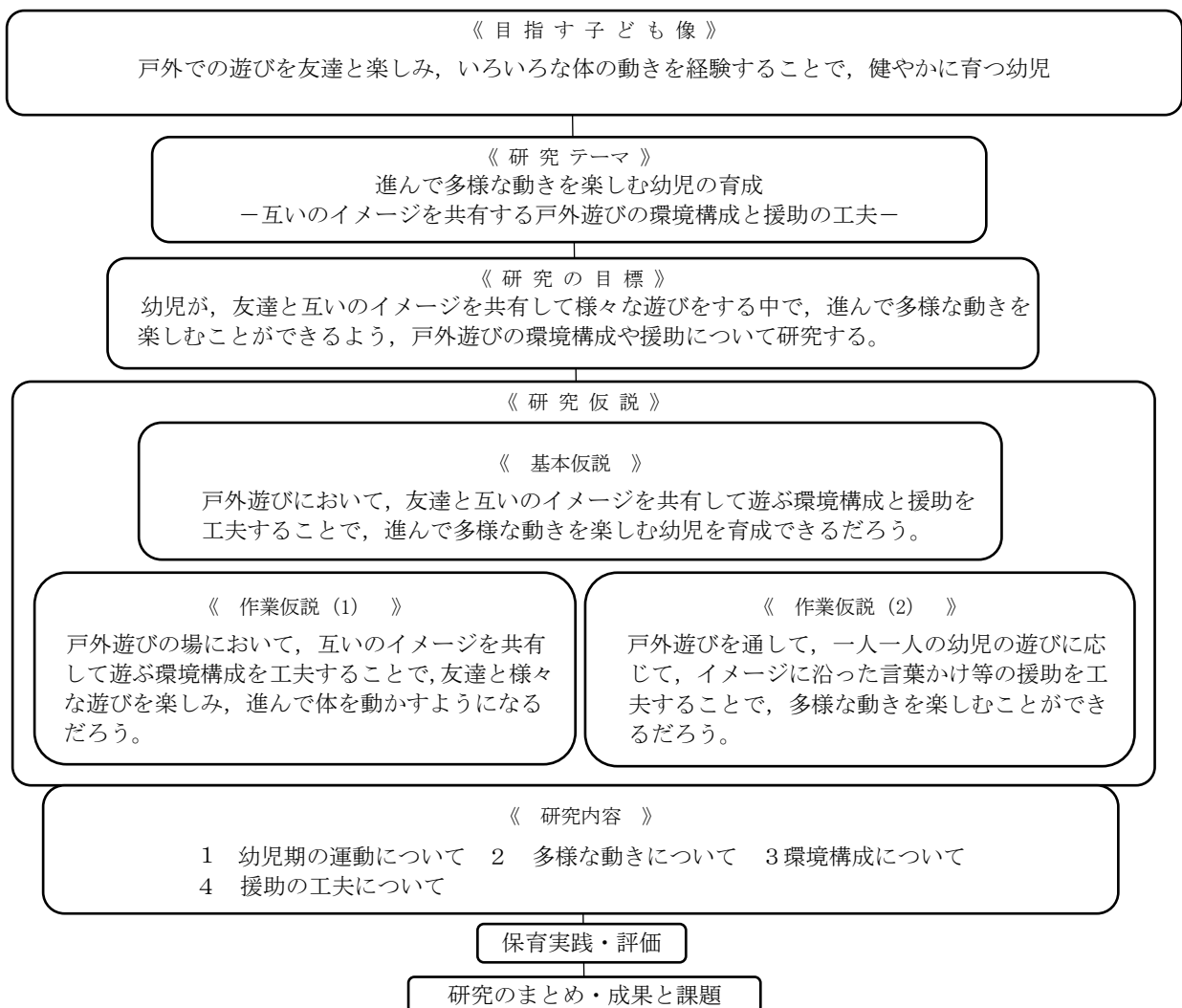
戸外遊びにおいて、友達と互いのイメージを共有して遊ぶ環境構成と援助を工夫するこ

とで、進んで多様な動きを楽しむ幼児を育成できるだろう。

### 2 作業仮説

(1) 戸外遊びの場において、互いのイメージを共有して遊ぶ環境構成を工夫することで、友達と様々な遊びを楽しみ、進んで体を動かすようになるだろう。

(2) 戸外遊びを通して、一人一人の幼児の遊びに応じて、イメージに沿った言葉かけ等の援助を工夫することで、多様な動きを楽しむことができるだろう。



## VI 研究内容

### 1 幼児期の運動について

#### (1) 領域「健康」について

教育・保育要領において、生涯を通じて健康で安全な生活を営む基盤は、幼児期に心と体を十分に働かせて生活することによって培われていくことが述べられている。こども園においては、幼児が保育教諭や他の幼児との温かい園生活の中で自己を発揮し、充実感や満足感を味わうことができるようにすることが大切であり、このような健康な心は、幼児が自ら体を十分に動かそうとする意欲や運動しようとする態度を育てる上でも大切であることが述べられている。幼児がいろいろな遊びの中で十分に体を動かす気持ちよさを感じながら、身体諸機能の調和的な発達が促されるようにすることが、こども園には求められている。

#### (2) 幼児期の運動発達段階と基礎的な運動

杉原(2014)は、ガラヒューの運動の生涯発達モデルをもとに運動発達の段階を4つに分けて説明している。その中で幼児期は基礎的な運動の段階だとし、この段階は人間の持つ全ての基礎的な運動を習得する重要な段階であり、その後の段階や生涯の生活の運動を支える土台となることを述べている。表1は杉原(2014)を基に筆者がまとめたものである。

表1 運動発達の段階

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>①反射的運動の段階(胎児から1歳ぐらいまで見られる)</li> <li>②初歩的な運動の段階(誕生から2歳ぐらいまで)</li> <li>③基礎的な運動の段階(2歳から6・7歳ぐらいまで)</li> <li>④専門的な運動の段階(7歳頃から生涯にかけて)</li> </ul> |
|---|

人間の持つ基礎的な運動について、石河ら(1980)は、幼稚園での遊びの観察から全部で84種を提示しているが、杉原(2014)は園生活で保育者がより観察しやすいように幼児期に見られる基礎的な運

動として37項目にまとめている。表2は、杉原(2014)を基に、筆者が更にまとめたものである。

表2 幼児期に見られる基礎的な運動

(A) 姿勢・移動	(B) 操作
<ul style="list-style-type: none"> <li>・走る, 追いかける, 逃げる</li> <li>・登る, 降りる</li> <li>・跳ぶ, 跳びこす</li> <li>・ステップ, スキップする, はねる</li> <li>・すべる</li> <li>・乗る</li> <li>・ぶらさがる</li> <li>・寝転ぶ, 寝る, 起き上がる</li> <li>・くぐる</li> <li>・まわる</li> <li>・かわす</li> <li>・踏む</li> <li>・わたる</li> <li>・入り込む</li> <li>・ころがる</li> <li>・はう</li> <li>・逆立ちする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運ぶ, 動かす</li> <li>・持ち上げる</li> <li>・かつぐ, 持つ</li> <li>・積む, のせる</li> <li>・押す</li> <li>・投げる</li> <li>・掘る</li> <li>・ひく, ひっぱる</li> <li>・ころがす</li> <li>・ける</li> <li>・うける, 捕る,</li> <li>・うつ, たたく</li> <li>・まわす</li> <li>・振る, 振り回す</li> <li>・ささえる</li> <li>・こぐ</li> <li>・負う, おぶさる, 組む</li> <li>・しばる</li> <li>・たおす</li> <li>・つく</li> </ul>

これらのことから、幼児期に習得する基礎的な運動は様々な動きがあり、(A)姿勢・移動、(B)操作と分類されているように、どのような遊びや生活をしているかにより、生じる動きが変わってくるのが考えられる。こども園においては、これらの基礎的な運動を幼児が経験できるように、保育教諭は、人の体の動きにどのような種類があり、どのような遊びや生活をする、どの動きを経験できるか知っておく必要があると思われる。

#### (3) 幼児期に発達する運動能力

また、杉原(2014)は、筋力や持久力などの運動体力は青年期に最も高くなるが、幼児期は、運動コントロール能力が急激に発達する時期であることを述べている。そのため幼児期には、体力作りや筋力作りを目的とした特定の運動のみを続けるよりも、様々な運動を通して、運動コントロール能力の発達を促すことの方が大切だとしている。運動コントロール能力には3つの要素があり、それらの組



み合わせにより様々な基礎的な運動のバリエーションが生じる。図1は杉原(2014)を基に、筆者が作成した。

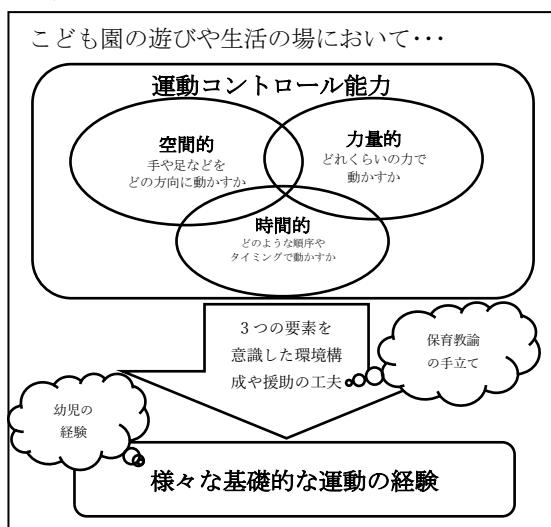


図1 こども園での様々な基礎的な運動の生じ方

本研究では、幼児が様々な基礎的な運動を経験できるよう、遊びの中で運動コントロール能力の3つの要素を意識した環境構成と援助を工夫していきたい。

## 2 多様な動きについて

### (1) 動きの多様化

文部科学省は、現代の社会において生活が便利になったことや、遊ぶ場や仲間、時間の減少などにより幼児の経験する動きが少なくなっていることを懸念し、幼児期に運動することの大切さを伝えるために幼児期運動指針(2012)を策定している。その中で、幼児が様々な基礎的な運動を習得していくことを、「動きの多様化」と表し、年齢と共に習得する動きが増大することであると説明し、幼児に運動を経験させる上で重要なキーワードであることを述べている。そして、幼児が多様な動きを経験できるように、大人は様々な遊びを取り入れることが必要であることを示している。また、幼児がどのように動きを多様に習得していくかについて、「体のバランスをとる動き」

「体を移動する動き」「用具などを操作する動き」の順で説明し、幼児期の年齢ごとに経験したい遊びや動きを示している。表3

は、幼児期に幼児期運動指針(2012)を基に、筆者が作成した。

表3 幼児期に経験したい動きと遊び

年齢	動き	遊び
3歳から4歳	<p><b>体のバランスをとる動き</b> 立つ、座る、寝転ぶ、起きる、回る、転がる、渡る、ぶら下がる、など</p> <p><b>体を移動する動き</b> 歩く、走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる、這う、よける、すべる、など</p>	<p>自分から進んで何度も繰り返し返すことを楽しむ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・屋外での滑り台</li> <li>・ブランコ</li> <li>・鉄棒</li> <li>・巧技台</li> <li>・マット など</li> </ul>
4歳から5歳	<p><b>用具などを操作する動き</b> 持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こぐ、掘る、押す、引く、など</p>	<p>友達と一緒に運動することを楽しんだり、ルールや決まりを作ることにもしろさを見いだしたりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なわとび</li> <li>・ボール遊び など</li> </ul>
5歳から6歳	<p><b>体のバランスをとる動き</b></p> <p><b>体を移動する動き</b></p> <p><b>用具などを操作する動き</b></p> <p>をよりなめらかに遂行できるようにする</p>	<p>友達と共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動したり役割分担して遊ぶようになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボールをつきながら走るなど基本的な動きを組み合わせた遊び</li> </ul>

このような視点を考慮し、園生活においては、保育教諭が幼児の年齢や発達に側して、動きが多様化できるよう遊びや生活を構成していく必要がある。しかし、幼児の発達は必ずしも一様ではないので、一人一人の発達の実情を捉えることに留意していきたい。

### (2) 多様な動きを楽しむために

幼児期運動指針(2012)では、幼児期における運動は、適切に構成された環境の下で幼児が自発的に取り組む様々な遊びを中心に体を動かすことが大切であるとされている。遊びとしての運動は、大人が一方向的に幼児にさせるのではなく、幼児が自分の興味や関心に基づいて進んで行うこと、自分たちで考えて工夫し挑戦できるようにしていくことで、主体的に関わることができるということが述べられている。幼児にとっての運動は、主体的な遊びとしての運動であることが大切であり、主体的に遊びを楽しむことが、体を動かす上で重要ではないかと考える。本研究においても、幼児が様々な遊びに主体的に関わることで多様な動きを経験できるようにしたい。

### 3 環境構成について

(1) 互いのイメージを共有して遊ぶ環境構成  
教育・保育要領において、幼児は身近な環境から刺激を受け、心の中にあるイメージを様々に表現していることが述べられている。幼児は友達と園生活を重ね、共通の経験をする中で次第にイメージを共有し合い、相手と一緒に見立てをし、目的やストーリーを持って遊ぶことを楽しむようになる。保育教諭は、幼児のイメージがどのように遊びの中に表現されているかを理解し、幼児同士が互いのイメージを受け入れ、遊びを工夫することができるように、道具や遊具、素材を用意し環境を構成していくことが大切だと思われる。

また、河邊(2020)は、ごっこ遊びにはテーマに合わせた拠点としての「場」が必要であり、幼児が自分たちで空間を仕切るなど場を見立てられるような環境も大切だということを述べている。

本研究において幼児が友達とイメージを共有する遊びは、ごっこ遊びに発展することが予測され、幼児が「場」からイメージを持ったり、イメージに合わせ「場」を選んだりすることができるように、環境構成を工夫していく必要があると思われる。

#### (2) 多様な動きを経験できる環境構成

吉田(2022)は、今ある遊びの実態に即して変化を加えることで、遊びの面白さが変わり多様な動きを引き出す可能性があることを述べ、表にまとめている(表4)。

表4 遊びの変化や発展

—多様な動きを引き出す工夫—

視点	変化
人数を変える	個(一人)から複数, 集団へ
空間を変える	広さ—狭さ, 高さ—低さ, 傾斜, 動線など
図形を変える	○, △, □, 直線, 曲線など
方法を変える	回数, やり方など

出典 吉田(2022)

互いのイメージを共有する遊びにおいても人数やメンバー、遊ぶ場、遊具や用具、幼児の動線や、遊び方のルールを変えるなど環境を再構成していくことで遊びの内容に変化が生まれ、遊びの中で生まれる体の動きにバリエーションができるのではないかと考える。その際、幼児の遊びのイメージに沿って変化を加えることで、イメージが広がり遊びを楽しむ中で、新たな動きを経験することができるのではないかとと思われる。

本研究においても、今ある環境を再構成していくことで遊びを展開していくことができるようにし、その中で幼児が多様な動きを経験できるようにしていきたい。また、多様な動きを経験する中で怪我や事故がないよう、安全に配慮した環境構成にも留意し、安全面について幼児と一緒に確認し、研究を進めていきたい。

#### (3) 戸外ならではの環境構成

教育・保育要領において、戸外は室内とは異なり、解放感を感じながら思い切り体を動かすことができることや、幼児の興味関心を喚起させる自然現象があることから、幼児が戸外で遊ぶことの必要性が指摘されている。

また、秋田(2019)は、戸外遊びの特性はその多様性にあり、土や砂場、芝生、様々な遊具、道具などの多様な環境が、子どもの経験を豊かにしていくことを述べている。このようなことから、戸外は幼児が思い切り体を動かして遊ぶことができることに加え、興味関心をもって多様な環境に関わり、様々な経験をすることができると考えられる。さらに、戸外遊びは、戸外ならではの木や落ち葉などの自然物、遊具や道具、場、光や風などの自然現象から幼児がいろいろなイメージを持つことができるのではないだろうか。

本研究においても、そのイメージを持って、友達と様々な遊びを楽しむことができるように環境構成を工夫していきたい。

#### 4 援助の工夫について

(1) 互いにイメージを共有して遊ぶための援助  
河邊(2020)は、幼児のごっこ遊びが充実するためには、幼児のイメージを汲み取り、実現に導く保育者の援助が不可欠であることを述べている。充実したごっこ遊びは、あるテーマの下、「役割見立て」「モノ見立て」「場の見立て」の三つが関連し、メンバー間の見立ての相互理解ができていく状況であることを説明している(図2)。そして、保育教諭は幼児の遊びの様子をよく見て理解し、三つがうまく関連できるよう、また幼児同士の相互理解ができるよう援助の可能性を探っていく必要があることを述べている。

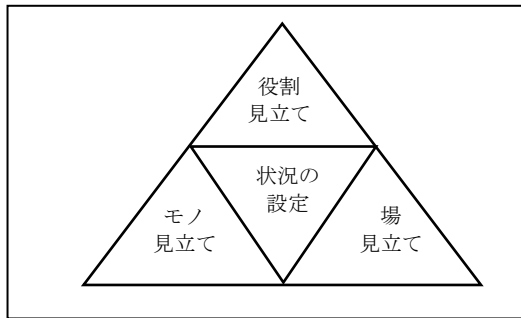


図2 ごっこ遊びの構成要素 出典 河邊(2020)

本研究においても、幼児が互いにイメージを共有して遊ぶことができるように、これらの三つの関連を意識しながら、イメージに沿った言葉かけや、材料の提供、遊びの内容を提案するなど、援助を工夫していきたい。

(2) 保育マップ型記録や動画等の記録を活用した援助

保育環境図に幼児の遊びの様子を書き込むことで、戸外遊び全体を俯瞰でき、どの場所で、どの仲間と、どのような遊びをしているかを確認できると考える。本研究では、それを基に幼児と会話し、イメージを膨らませたり遊びの内容を一緒に考えたりするなど、援助に生かしていきたい。また、遊びの様子を動画や写真で撮影し、遊びの中で聞き取ることができなかった友達との会話や、やりとりを振り返ることで、幼児理解と援助につなげていくことができると考える。それを基に幼

児への言葉かけや、友達とのやりとりの仲立ちなど、イメージを共有して遊びを楽しむことができるように援助していきたい。

(3) 多様な動きの観察表を活用した援助

幼児が遊びの中で多様な動きを楽しんでいるか読み取る上で、幼児がどのような体の動きをしているか観察することが必要だと思われる。観察する上で、杉原(2014)がまとめた基礎的な運動観察表をもとに、本学級の幼児の実態や遊びの内容を考慮して多様な動きの観察表を作成した(表5)。

表5 多様な動きの観察表

姿勢・移動系の動き	動きが見られたら○	操作系の動き	動きが見られたら○
・走る		・運ぶ	
・登る, 降りる		・持ち上げる	
・跳ぶ, 跳びこす		・積む, のせる	
・スキップする, はねる		・押す	
・すべる		・投げる	
・乗る		・掘る	
・ぶらさがる		・ひく, ひっぱる	
・寝転ぶ, 起き上がる		・ころがす	
・くぐる		・ける	
・かわす		・うける, 捕る	
・踏む		・まわす	
・わたる		・振る, 振り回す	
・入り込む		・ささえる	
・ころがる		・うつ	
・はう			

観察表に記入する際は、動画や写真を活用し、遊びの後に記録していく。あまり見られない動きについては、遊びの中で経験することができるように、幼児のイメージに沿って取り入れるなど、援助を工夫していきたい。また、保育教諭が体の動きに着目した言葉かけをするなど、幼児自身が体の動きも意識して遊びを楽しむことができるよう援助を工夫していきたい。

## Ⅶ 保育実践

### 1 検証保育の全体計画

実践	日程	副題	題材	ねらい	活動内容
1	11/28	楽しい園庭にしよう	当山こども園園庭クイズにチャレンジ!	・園庭の中の今まで遊んだことがない場所にも興味を持つ。	・テレビに映し出された園庭のスポット写真をみんなで見て、どの場所か当てるクイズをする。
2	11/30		わくわくする園庭の名前を考えて地図を作ろう!	・自分たちで園庭の名前を考えることで遊びに期待を持つ。 ・園庭の地図作りを通してどの場所でどのような遊びができるか期待を持つ。	・大きい模造紙に、みんなで考えた園庭の名前やスポット写真を貼る。 ・地図は部屋に掲示し、新しい遊びを考えたら絵や字で表し貼っていく。
3	12/8	いろいろな道具や素材で遊ぼう	どんな形?どんなさわり心地?いろいろな道具や材料で遊んでみよう!	・いろいろな道具や材料に触れて遊ぶことで、様々な動きを楽しむ。	・タイヤ、ゴム、段ボール、ホースなどに触れ、それらを使って転がしたり、引っ張ったりして遊ぶ。 ・初めて使う道具に関しては、安全な使い方をみんなで確認する。
4	12/12		どんな遊びができるかイメージしてみよう!	・いろいろな道具や材料を使い自分なりのイメージを持って遊び、様々な動きを楽しむ。	・タイヤ、ゴム、段ボール、ホースなどを組み合わせたり、それらを園庭の様々な場所で使うことで、家や車トンネルなどそれぞれのイメージを持って遊ぶ。
5	12/15	友達と遊びを考えて試してみよう	当山ランドパークでどんな遊びができるかな?	・友達と遊びのイメージを出し合うことで、様々な動きを楽しむ。	・いろいろな道具や材料、園庭の様々な場所、自然ものなどからイメージを持ち、気の合う仲間とそのイメージを出し合って遊ぶ。
6	12/19		当山ランドパークオープン準備中①	・友達と遊びのイメージを共有し、そのイメージに近づけることができるよう相談して遊ぶ。	・気の合う仲間と遊びのイメージを共有し、イメージに近づけることに必要な材料や素材を相談して使う。 ・気の合う仲間といろいろな材料や園庭の自然ものなどを使った装飾や、絵や色を付け加えるなどして、イメージを表現して遊ぶ。
7	12/20		当山ランドパークオープン準備中②	・友達と遊びのイメージを共有し、遊びの内容を工夫する。 ・戸外において、友達と考えた遊びの中で体を動かすことを楽しむ。	・気の合う仲間と遊びのイメージを共有し、いろいろな道具や材料、素材を工夫して使うなど、遊びの内容を相談する。 ・おばけやしき、温泉屋さん、タイヤの車、魚釣り、サッカーごっこなど、自分たちで考えた遊びを実際に試し、体を動かして遊ぶ。
8	1/6	友達と考えた遊びの中でいろいろな動きを楽しもう	当山ランドパークの遊びを思い出そう!	・冬休み前に経験した遊びを思い出し、友達と相談することで期待を持つ。	・みんなで園庭マップや自分たちの遊びの動画を見て振り返り、楽しかったことや、これから準備することを相談する。
9	1/10		当山ランドパークオープン準備中③	・戸外において、友達と考えた遊びの中で体を動かすことを楽しむ。	・当山ランドパークオープンに向けて友達と準備をし、試しながら体を動かして遊ぶ。 ・気の合う仲間と考えた遊びについて写真を使ってみんなに紹介する。
10	1/11 本時		当山ランドパークオープン! みんなで体を動かして遊ぼう!	・戸外遊びにおいて様々な遊びをすることで、自ら多様な動きを楽しむ。	・自分の興味のある遊びのコーナーで遊び、いろいろな体の動きを楽しむ。 ・楽しかったことや、発見した体の動きを発表して遊びを振り返る。

### 2 検証保育

(1) 題材名 「園庭に楽しい遊び場を作ろう!」

(2) 題材として取り上げた理由

本学級の幼児は、戸外で遊ぶことが好きな子と室内での遊びを好む子がいるが、戸外ならではの解放感を味わったり、自然に触れたり、思い切り体を動かしたりすることで、幼児の身体諸機能の発達がより促されると考える。そこで、園庭に興味を持ち、自分たちのイメージした遊びを作り出すことで、主体的に戸外遊びを楽しみ、その中で生まれる様々な遊びを通して多様な動きを経験することができるのではないかと考え本題材を取り上げた。

(3) 互いのイメージを共有した遊びの中で多様な動きを楽しむ姿を読み取る視点

動画や写真を基にした振り返りや多様な動きの観察表の活用を通して、友達とイメージを共有した遊びや多様な動きを楽しんでいるか読み取り、環境構成や援助に活かしていく。

(4) 実践の保育展開

	○遊びの内容    ◎子どもの姿	保育教諭の願い   ★援助   ◇環境構成
【実践1・2】	<p>○園庭のスポット写真を見てどこか当てるクイズをする。</p>  <p>◎どの子どもクイズを楽しんでいた。 ◎「ここで鬼ごっこしたことあるよ」「アフリカマイマイがいるところだよ」など、自分の経験を話していた。</p> <p><b>図3 テレビ画面を使ったクイズの様子</b></p> <p>○園庭にわくわくする名前を付けて地図を作る。 ○遊園地などをイメージして名前を考えたり、地図に絵や文字を描いたりして楽しんでいた。</p>	<p><u>園庭のいろいろな場所に興味を持ってほしい。</u> <u>今まで園庭でどのように遊んでいたか振り返り、これからの遊びに期待を持ってほしい。</u></p> <p>◇テレビの画面で映し出すことで興味を持ってクイズに参加できるようにする。 ★クイズの途中で幼児がつぶやいた言葉を拾い、全体に知らせ共有できるようにする。 ◇大きな紙に園庭のスポットの写真を貼り、部屋に掲示しておくことで新しい遊びを考えたら絵や文字を書き込み、地図を元に園庭での遊びに期待が持てるようにする。 ◇園庭の名前を考えたら紙に書いてポストに入れられるようにする。 ★園庭の名前についてそれぞれ考えた名前を組み合わせることで決めることができるように提案する。</p>
【実践3・4】	<p>○戸外でタイヤ、ホース、ゴムに触れて遊ぶ。 ○いろいろな道具の特性に気付き、転がす、引っ張る、くぐる等、様々な動きを楽しんでいた。</p>  <p>◎タイヤを転がしたり、上に乗って跳ねたりと様々な動きを楽しんでいた。</p>  <p>◎固定遊具の下で段ボールと新聞紙を使い家の中のお風呂を作り遊んでいた。</p> <p>ここは陰だから家の中ね！</p> <p><b>図4 いろいろな道具や素材を使って遊ぶ様子</b></p>	<p><u>いろいろな道具を使い戸外で体を伸び伸びと動かして遊んでほしい。</u></p> <p>◇戸外遊びの時間を十分に設け、タイヤやホースなどいろいろな道具を準備し興味を持った道具に触れて遊ぶことができるようにする。</p> <p><u>いろいろな道具の特性に気付き、多様な動きを楽しんでほしい。</u></p> <p>★安全面に配慮しつつ、幼児が思いついた遊び方を認め、「車みたいだね」などイメージが膨らむような言葉かけをして、より多様な動きが楽しめるようにする。</p> <p><u>戸外の自然に触れ遊びを楽しんでほしい。</u></p> <p>★葉っぱや木の実を集める幼児の姿を全体に伝え、他の幼児も自然に興味を持てるようにする。 ★自然に対する幼児の気付きの発言を拾い、光や風などの自然事象にも興味を持てるようにする。</p> <p><u>園庭の場やいろいろな道具・素材からイメージを持ち、遊びを楽しんでほしい。</u></p> <p>◇段ボールや牛乳パック等のいろいろな素材を準備する。 ★場や、道具、素材からイメージした遊びを受け止め、遊びの振り返りの時間にみんなに伝え共有できるようにする。</p>
【実践6・7】	<p>○友達とイメージを共有して遊ぶ中で、体を動かすことを楽しむ。</p>  <p>◎段ボールでサッカーのゴールとキーパーを作り、サッカーごっこで蹴ったりボールを投げたりして楽しんでいた。</p>  <p>◎花火をイメージして並べた牛乳パックを、保育教諭と跳び越えて跳ねたり、走ることを楽しんでいた。</p> <p><b>図5 イメージを共有して仲間と遊ぶ様子</b></p>	<p><u>いろいろな道具や素材を使って、気の合う仲間とイメージを共有して遊んでほしい。</u></p> <p>◇園庭での遊びの地図を掲示し、遊びの内容やそこで遊ぶ友達の名前がわかるようにした。 ★幼児同士の会話に混ざり、イメージが膨らむような言葉かけをしたり、材料等を提案したりする等の援助をする。</p> <p><u>イメージした遊びの中で様々な動きを楽しんでほしい。</u></p> <p>◇活動の前に前回の遊びの様子の動画を見る時間を設け、どのような動きをしているか全体で振り返る。 ★保育教諭も一緒に遊び、様々な動きを幼児と楽しむことで多様な動きについて伝える。 ★遊びの様子を動画や写真で撮影し、楽しんでいる動きや、あまり経験していない動きの実態を把握し、様々な動きが経験できるように遊びの内容や材料を工夫する。</p>
評価・課題	<p>・園庭のいろいろな場所に興味を持ち、自分たちで遊びを考えたと進んで戸外に出て遊ぶ姿が多く見られるようになった。 ・安全に配慮しつつ、いろいろな道具や材料を使って遊ぶ姿を受け止めたことで、様々な動きを楽しむことができた。 ・イメージを共有できるように話し合う時間を設けたことで、遊び方やルールなどを決めて遊ぶようになってきた。 ・あまり経験していない動きを遊びに取り入れる際、保育教諭の意図と幼児の主体性とのバランスに難しさを感じた。</p>	

### 3 本時の保育実践『とうやまランドパークオープン！みんなで体を動かして遊ぼう！』

#### 保育指導案

令和5年1月11日(水) 9:00~10:00  
 ゆり組 男児18名 女児12名 計30名  
 園場 こずえ

#### (1)前日までの幼児の姿

冬休み前の遊び「とうやまランドパーク」を思い出し、気の合う仲間と遊びに必要な道具や素材を使って遊びのコーナーを作り、試しながら体を動かすことを楽しんでいる。全体での話合いで、自分たちの作ったコーナーの楽しい所を紹介したことで、「さかなつりに行きたい!」「お化け役になってみたい!」などの声も聞こえ、他のコーナーでも遊ぶことに期待を持っている。

#### (2)本時のねらい

- ・戸外で様々な遊びに進んで参加し、多様な動きを楽しむ。

#### (3)保育仮説

- ・戸外遊びの場において、タイヤや段ボールなど様々な道具や素材を用意することで、友達とイメージを共有して遊びを楽しみ、多様に体を動かすことができるだろう。
- ・遊びの中で、幼児一人一人の遊びの様子や体の動きに応じて、言葉かけや遊びを一緒に工夫するなどの援助を行うことで、多様な動きを楽しむことができるだろう。

#### (4)教材(道具・素材)について



図6 様々な遊びや動きに繋がる道具と素材

- ・道具は、遊びの汎用性が高いタイヤ、ホース、縄、ゴム等を用意する。タイヤは単体でも転がしたり上に乗ったりして遊ぶことができ、また複数を積み重ねたり並べたりできることから、様々な遊びや動きに繋がる事が予想され、今回幼児が初めて触れる道具として取り入れた。また、本学級の幼児が遊びの中であまり経験していない引く、はねる、くぐるなどの動きを引き出すことを予測し、縄、ホース、ゴムを用意した。
- ・身近な素材は、これまで幼児が遊びの材料として使ってきた段ボール、牛乳パック、新聞紙を用意した。室内の遊びでこれらの素材を使い、家や玩具を作った経験がありイメージをより膨らませやすい材料として有効であると考えた。

#### (5)展開(実践10・本時)

時間	○活動の流れ ・子どもの姿	★保育教諭の援助 ◇環境構成
8:30	・活動前に水分補給や排泄を済ませておく。	◇戸外の天候や危険な箇所がないか確認する。 ◇道具や材料を準備し、遊びのコーナーを設置する。
8:35	○ゆり組の部屋で話合い ・グループごとに並んで集まる。 ・保育教諭の話聞く。 ・「とうやまランドパーク」のテーマ「みんなで体をいっぱい動かして遊ぼう」を確認し、今日の活動の流れについて知る。	★とうやまランドパークの遊びのテーマを伝えることで体の動きを意識して遊ぶことができるようにする。 ★今日の活動の流れを伝える。 ◇活動の流れをホワイトボードに掲示する。
8:45	○戸外に出る準備 ・帽子、水筒を準備しマスクは外しておく。 ・ジャンパーなどの上着は調整して着脱する。 ・靴に履き替え水筒を水筒かけにかける。	★戸外に出ることを避ける幼児には個別に対応し、戸外での遊びの楽しさを伝えて誘うなどの援助をする。 ★戸外に出たら並んで待つように伝える。
8:50	○遊びのコーナーの紹介 ・これまで考えた「とうやまランドパーク」の遊びのグループごとに遊び方を紹介する。 ・安全に遊ぶために各コーナーの遊び方のルールを認める。	◇遊びのコーナーを回って説明を聞く時間を設け遊び方を全員で共有できるようにする。 ★道具の使い方や遊び方などについて全員で確認し安全に気をつけて遊ぶことができるようにする。 ★自分が遊びたいコーナーに行き遊び方を伝える。
9:00	○戸外遊び(魚釣り、温泉屋さん、サッカーごっこ、くるまごっこ、貨物船ごっこ、お化け屋敷、鬼ヶ島の鬼退治) ・それぞれの遊びの中で、様々な体の動きを楽しむ。 ・友達とやりとりしながら互いにイメージを共有して遊ぶ。 ・他のコーナーにあまり興味を持たずに同じコーナーで遊び続ける幼児がいる。	★それぞれの遊びでどのように遊んでいるか確認し、イメージを持っている色々な動きを楽しめるような言葉かけをしたり、一緒に遊びの内容を工夫したりするなどの援助をする。 ★同じコーナーで遊び続ける幼児にはじっくり遊んでいる姿も認め、そのコーナーでの遊びの深まりや体の動きの変化を観察し見守る。(今後の遊びの中で別の遊びにも目を向けられるように繋げていく) ★遊ぶ幼児がいないコーナーでは保育教諭が率先して遊

<p>9:35</p> <p>9:40</p> <p>9:50</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びのコーナーでそれぞれ人数が異なり、あまり遊ぶ幼児がいないコーナーもある。</li> <li>・遊ぶ時間が終わる5分前の合図を聞き、時計を確認する。</li> </ul> <p>○休息(水分補給)</p> <p>○集まる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・戸外の木の下にグループごとに並んで集まる。</li> </ul> <p>○遊びの振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今日の遊びについて楽しかったことや、発見した体の動きについて話し合う。</li> </ul> <p>○活動終わりの挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次の活動への期待を持ち、活動を終える。</li> </ul> <p>○片付け</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・担当コーナーの仲間と協力して片付けを行う。</li> </ul>	<p>ぶことで幼児の興味を引きつけられるようにする。</p> <p>★遊ぶ時間が後5分で終わることを伝え、遊びに集中している気持ちを少しずつ遊びが終わることに切り替えられるようにする。</p> <p>◇保育教諭が先に集まる場所で待ち、視覚的に伝える。</p> <p>★幼児が楽しかったことや発見した体の動きについて発表したことをまとめ、全員で共有できるようにする。</p> <p>★保育教諭が観察した一人一人の遊ぶ姿や、遊びの中でどのような動きを楽しんでいたかを全員に伝え、遊びを振り返ることができるようにする。</p> <p>★明日以降の遊びの予定について知らせ、楽しみにできるようにする。</p> <p>◇いろいろな道具や素材を整理することができるよう遊びのコーナーごとに片付ける場所を設ける。</p> <p>★自分たちで片付ける姿を認め、進んで片付けができるようにする。</p>
-------------------------------------	--	--

(6)本時の幼児の遊びの様子



図7 おばけやしき・温泉屋さんでの遊びの様子

おばけやしきでは、段ボールで転がるおばけ、箱に入って動くおばけになって動いた後に、ゴムの蜘蛛の巣が張り巡らされた通路をくぐるというように、様々な動きを楽しんでいた。温泉屋さんでは、牛乳パックの段差を飛び越えたり、木からジャンプしたりなど体を動かした後で温泉に入って疲れを癒やすというイメージで楽しんでいた(図7)。



図8 サッカーごっこ・貨物船ごっこの遊びの様子

サッカーごっこは、段ボールで作ったゴールに新聞紙で作ったボールを蹴り入れることを楽しんでいた。国別のチームに分かれるなどワールドカップを見た経験遊びに取り入れていた。貨物船ごっこはあまり幼児が集まらなかったが、保育教諭の言葉かけをきっかけに、荷物を高く積み上げることを楽しんでいた(図8)。

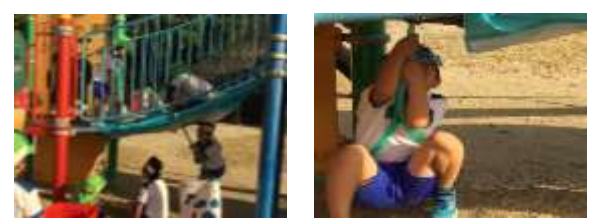


図9 さかなつりの遊びの様子

さかなつりの遊びは、固定遊具の網の部分や周りの色などから海をイメージし、ちょうどよいホースの長さを利用し魚役の人を引っ張って釣りあげるといった動きを楽しんでいた。釣る人と釣られる人で動きに違いがあり、役を交代して楽しんでいる様子が見られた。他にも網の部分に行くまでに階段を上ったり、滑り台を滑って下に移動する等の動きも見られた(図9)。



図10 くるまごっこ・鬼ヶ島の鬼退治での遊びの様子

くるまごっこは、コースが長く最後まで引くことが大変な様子が見られたが乗客を降ろして引くなど自分たちで工夫して遊んでいた。また「ガソリンいれてきまーす」と言って水筒の水を飲むなど、イメージを膨らませて遊んでいた。鬼ヶ島の鬼退治では、砂に埋められたきびだんごを探して鬼に投げる遊びだが、砂を掘ってきびだんごを埋めることに夢中になる子もいた。穴をほって入れた後に、スコップで平らにするために砂をたたくなどの動きも見られた(図10)。

評価・課題

- ・一人一人が戸外での遊びに進んで参加し、それぞれのコーナーで友達とイメージを共有して遊ぶことを楽しんでいた。
- ・それぞれのコーナーでいろいろな動きを経験し、さらに幼児のアイディアで新たな動きが生まれていた。
- ・遊びを始める前に全員で遊び方や安全面について確認したことで、いざこざや怪我などなく楽しく遊ぶことができた。しかし、説明の時間が長く遊ぶ時間が少なくなってしまったので、地図や動画等を使って説明する方法も今後取り入れていきたい。
- ・遊びのコーナーが多く保育教諭の配置が少なかった為、遊びが発展するような援助が十分にできなかった。

## Ⅷ 結果と考察

### 1 作業仮説(1)の検証

戸外遊びの場において、互いのイメージを共有して遊ぶ環境構成を工夫することで、友達と様々な遊びを楽しみ、進んで体を動かすようになるだろう。

#### (1) 戸外遊びに期待を持つ環境構成

##### ① 手立て

実践2では園庭の地図を作り、部屋の中の幼児が目にとまりやすい場所に掲示しておいた。また園庭にわくわくする名前を付ける話合いや、地図を見ながら、園庭でどのような遊びができるか学級全体で話し合う場を設けた。

##### ② 結果

地図を掲示しておいたことで、幼児が新しい遊びを考えた際に、地図に遊びの絵や文字を書き込むことができ、発表などで伝えることが難しい幼児もイメージした遊びを学級全体に伝えることができた。地図を見ている幼児同士で園庭の様々な場所でイメージを持った遊びについて会話する姿が見られた(図11)。



図11 園庭での遊びの地図

また、園庭の名前を話し合った際は、「とうやまランドにしたい」「パークがいい！」など名前を考え、その場で発言できなかった幼児は手紙に書いて保育教諭が準備したポストに入れるなど期待を持つ様子が見られた。園庭でどのような遊びをしたいか話し合いの中で尋ねると、「本物のお化けが出

てくるところを作りたい!」「穴を掘って水をためて遊びたい!」等、自分なりのイメージを持って遊びを考え、楽しみにしている姿が見られた。

##### ③ 考察

部屋に常に園庭の地図を掲示しておいたことや、園庭の名前をみんなで考える場を設けたことは、園庭をみんなで楽しい遊び場にするという学級全体の雰囲気を作る上で有効であったと思われる。また個々が考えた遊びを話し合いの場で発表したり、地図に絵や文字で書き込めるようしたりするなど(図11)、一人一人に合わせて自分の思いや考えを全体に知らせる場を設けたことで、全員が戸外での遊びに参加する意欲を持ち、期待を持つことに繋がったと思われる。「〇〇がしたい!」等の幼児の発言があったことから、地図を見たり話し合ったりするなど、学級全体でイメージを共有することができるような環境構成は、戸外での遊びに期待を高める環境として有効であったと考える。

#### (2) 友達とイメージを共有して遊ぶ環境構成

##### ① 手立て

実践3では、タイヤ、縄、短いホース、ゴム紐等のいろいろな道具と、段ボールや牛乳パック、新聞紙等の素材を準備し、それらを使って戸外で遊ぶことができるようにした。また実践6から、幼児がよりイメージを表現することができるように絵の具マーカー、画用紙、ガムテープ等も準備し戸外で使えるようにした。

##### ② 結果

いろいろな道具や素材を紹介すると、最初は個々で興味のある道具や素材を手に取り、遊ぶ姿が見られた。一人でタイヤを転がしたり、ゴム紐を引っ張ったりなど特性を感じながら遊んでいたが、次第に友達と共通のイメージを持って遊ぶようになっていった(図12)。





図 12 イメージを共有して遊ぶようになる様子

他にも、段ボールを被り、しゃがんで歩き、おばけになる、ゴム紐をレーザーにくぐる、ホースを釣り竿に見立てて魚役の友達と引っ張り合うなど、友達とイメージを共有して体を動かして遊ぶ姿が見られた。また、ガムテープと新聞紙でボールを作ってサッカーをしたり、絵の具、マーカー、画用紙等を使い、お化け屋敷の壁を黒くしたり、温泉屋さんの看板を作ったりするなどイメージを形にするために友達と工夫して遊ぶ姿も見られた(図 13)。



図 13 イメージを形にしようとする様子

さらに、検証前と検証後で、戸外で体を動かす遊びにおける幼児の友達と遊ぶ様子や、遊びの内容について読み取り調査を行ったところ、以下のような結果となった(表 6)(図 14)。

表 6 戸外で見られた幼児の遊び

検証前に見られた遊び	検証後に更に見られた遊び
雲梯、登り棒、鉄棒、竹馬、やっこ、ぼっくりげた、フラフープ、鬼ごっこ、ブランコ、短縄跳び、長縄跳び、固定遊具での遊び、砂遊び	おばけやしきごっこ、車ごっこ、貨物船ごっこ、温泉屋さん、サッカーごっこ、魚釣りごっこ、鬼ヶ島の鬼退治ごっこ、タイヤ転がし

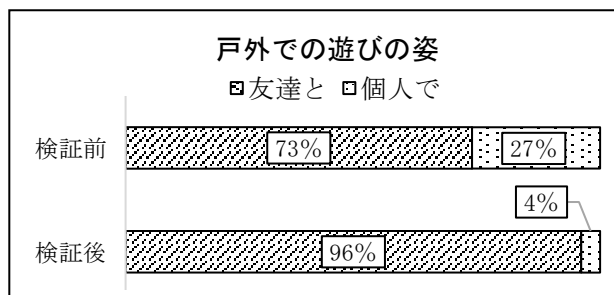


図 14 保育教諭による読み取り調査

③ 考察

これまでの戸外遊びでは、砂遊びの道具や、竹馬、縄跳びのように目的や使い方があらかじめ決まった道具を準備することが多かった。しかし、今回の実践では、今まで遊びに取り入れたことが少ないタイヤ、ホース、ゴム等を準備し、目的や使い方を決めず、自由な発想で使えるようにしたことで、道具や素材の特性から自分たちでイメージを作り上げて遊ぶことができたと考えられる(図 12)。そして、それぞれイメージを共有した仲間と遊びを考えていくことで様々な遊びが生まれたと思われる(表 6)。また、段ボールを被りしゃがんで歩いておばけになる、ゴム紐のレーザーにくぐる等の遊びの様子からも進んで体を動かしていたと考える。

さらに、日頃室内で使う絵の具や画用紙を戸外でも使えるようにしたことで、戸外遊びの中で友達とイメージを共有して工夫する姿が見られるようになり(図 13)、戸外で友達と遊ぶ幼児が検証前より増えたと思われる(図 14)。

これらのことから、いろいろな道具や素材を準備したことは、幼児が戸外において友達とイメージを共有して様々な遊びを楽しむ、進んで体を動かすことができる手立てとして有効であったと考える。

(3) 戸外でイメージを持って遊ぶ環境構成

① 手立て

戸外遊びの場所を限定せず、それぞれのイメージに沿って好きな場所で遊ぶことが出来るようにした。その際、その場所でどのよう

に遊ぶか保育教諭が観察したり、幼児に聞いたりして、その場所での安全な遊び方について確認した。

## ② 結果

園庭の好きな場所で遊ぶことができるようにしたことで、それぞれの場所のイメージを持って考えた遊びが見られた。お化け屋敷は園庭の木々が並んだ場所にコーナーを作り、魚釣りごっこは、固定遊具のアスレチックの網の部分から海をイメージし、そこを利用して遊びを楽しんでいた(図 15)。

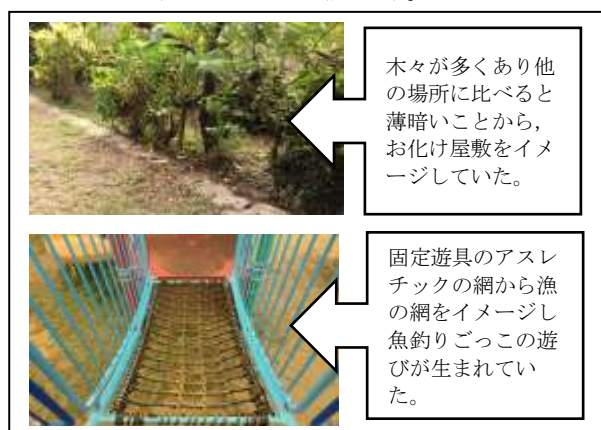


図 15 園庭の木々が並ぶ場所と固定遊具の網

また、検証前はブランコや固定遊具の周りでの鬼ごっこなど特定の遊びをする子が多く遊ぶ場所に偏りが見られたが、今回の実践では、いろいろな場所でイメージを持った遊びを楽しむ姿が見られ(図 16)、全員が進んで戸外に出て遊ぶようになった(図 17)。

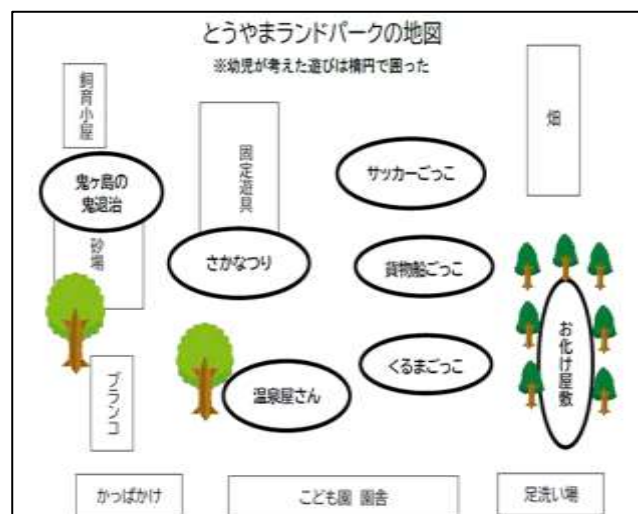


図 16 園庭のいろいろな場所で見られたイメージを持った遊び

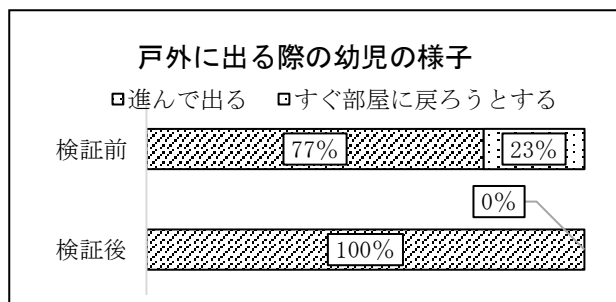


図 17 保育教諭による読み取り調査

今回の実践では、それぞれの幼児の場に対するイメージを大切に、遊び方を限定しなかったことで、固定遊具等の従来の使い方と違う遊びが生まれたと考える(図 15)。また、幼児が自分たちのイメージに沿って遊ぶ場を決めたことで、いろいろな場所で様々なイメージを持った遊びが見られたことや(図 16)、自分で好きな場所を選ぶことで、進んで戸外に出て遊ぶ幼児が増えたことから(図 17)、園庭の好きな場で遊ぶことができる環境構成は、進んで戸外に出て、友達と様々なイメージを持った遊びを楽しむことができる手立てとして有効であったと考える。

## (4) 戸外で様々な遊びを楽しむ環境構成

### ① 手立て

実践 10 では、園庭を「とうやまランドパーク」という遊び場に見立て、7つのコーナーで遊ぶことができるようにした。また、それぞれのコーナーを準備したメンバーで遊び方を説明する場を設けた。

### ② 結果

7つのコーナーから自分の興味のあるコーナーを選んだり、様々な遊びに参加したり友達の説明を聞いて、いろいろな動きに挑戦する姿が見られた(図 18)。



図 18 「とうやまランドパーク」の遊びの様子

また、遊びの後の振り返りでは、楽しかった遊びの内容や、体の動きについて話す幼児の姿が見られた(表7)。

表7「とうやまランドパーク」の感想

☆きびだんごをスコップで穴を掘ってうめたことが楽しかった。  
 ☆車を引っ張ったことが楽しかった。  
 ☆お化け屋敷で蜘蛛の巣をくぐるのが楽しかった。  
 ☆今日初めてさかなつりごっこをして楽しかった。

### ③ 考察

実践9まで、気の合う仲間とイメージを共有した遊びを充分楽しんだことや、他の友達が考えた遊びの紹介を聞いたことで、とうやまランドパーク全体に興味を持つようになり、様々な遊びに進んで参加する姿が見られたと考える(図18)。また、幼児の感想から、遊びの中で体を動かすことを楽しんだり、今まで経験していなかった遊びに参加したりしていたことがわかった(表7)。このようなことから、他の友達が考えた遊びのコーナーに参加する場を設けたことは様々な遊びの中で進んで体を動かす手立てとして有効であったと考える。

## 2 作業仮説(2)の検証

戸外遊びを通して、一人一人の幼児の遊びに応じてイメージに沿った言葉かけ等の援助を工夫することで、多様な動きを楽しむことができるだろう。

### (1) 幼児理解に基づく援助

#### ① 手立て

動画等の記録を基に一人一人の幼児の遊ぶ姿や、友達とのかかわり等の実態を把握し、一人一人の思いや考えを受け止め、遊びの内容を提案したり、一緒に遊びを進めるなどの援助を工夫した。

#### ② 結果

一人一人の幼児の思いに寄り添い、遊びが充実するような援助をしていったことで、A児とB児の戸外で遊ぶ姿に変容が見られた。検証前、検証後の2人の幼児の姿と、保育教諭の具体的な援助について表8にまとめた。

表8 A児とB児の変容の様子

	A児	B児
検証前の姿	A児は運動的な遊びより折り紙や空き箱製作などの遊びが好きで戸外に出てもすぐに部屋に戻ろうとする姿が見られた。	B児はこれまでも自分なりの遊びのイメージを持って遊ぶ姿がよく見られたが、友達とのかかわりが少なかった。
保育教諭の援助	空き箱製作が好きなA児を段ボールや新聞紙を使った遊びに誘った。サッカーボール、ゴール、キーパーを作り「折り紙を貼りたい」「観客席の看板を作りたい」というA児のアイデアを受け止め必要な材料を渡し、戸外でも製作ができるようにした。	B児の遊びに他の幼児も興味を持ってほしいと思い、学級全体に紹介した。またB児のイメージを大切に、「絵の具で色を塗りたい」「この材料を組み合わせた」という考えに沿ってイメージを形にするために、一緒に製作をして、どのような遊びにするか相談した。
検証後の姿	戸外での遊びを毎回楽しみにし、たくさんの友達が仲間に入りうれしそうにしていた。サッカーごっこを通して蹴る、かわす、投げる等の動きを楽しんでいた。	B児が形にしたものを「貨物船みたい」と他の幼児が名前を考え、それをB児も気に入り、貨物の船のイメージで他の幼児と荷物を運んだり、積み重ねたりという遊びを楽しんでいた。

### ③ 考察

A児の製作遊びが好きだという特徴や、B児の友達とのかかわりが少ないという発達段階を保育教諭が捉え、それぞれの思いや考えを丁寧に受け止め、遊びに誘ったり必要な材料を提供したり、一緒にイメージを形にするなどの援助を工夫したことで、遊ぶ姿の変容が見られるようになり、進んで多様な動きを楽しむことに繋がっていったと思われる。

このようなことから、幼児理解に基づいて援助を工夫することは、友達とイメージを共有して遊び、多様な動きを楽しむ手立てとして有効であったと考える。

### (2) 体の動きに着目した言葉かけによる援助

#### ① 手立て

全体の話合いの中で、保育教諭が遊びの中で大切にしたいことを幼児に伝える言葉かけを行った。また、遊びの中で、幼児のイメージに沿った言葉かけを、意図的に行う等の援助を行った。

#### ② 結果

いろいろな体の動きを経験することの大切さを伝える言葉かけを行ったことで、自分たちが考えた遊びのコーナーでどのような体の

動きをしているか考える姿が見られ、それを保育教諭と地図に書き込み、「自分たちのコーナーには引っ張る動きもあるよ！」と友達に伝える姿が見られた(図 19)。



図 19 多様な動きの大切さを伝える様子

また、保育教諭のイメージに沿った言葉かけをきっかけに、遊びの中に動きを新しく取り入れたり、動きのバリエーションが増えたりする様子が見られた。(図 20)

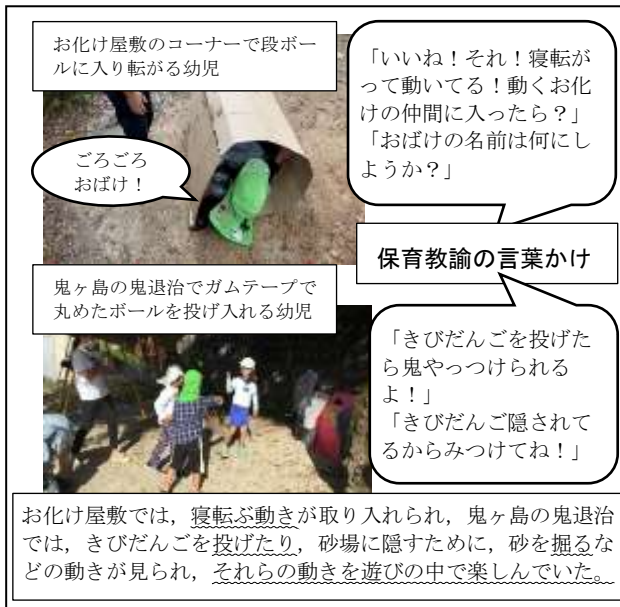


図 20 イメージに沿った言葉かけの様子

③ 考察

多様な動きを経験してほしいという保育教諭の意図を言葉かけによって伝えたことで、幼児自身も体の動きに着目し、遊びの中でいろいろ

な動きを発見する姿が見られるようになったと考える(図 19)。また、幼児のイメージに沿って言葉かけをしたことで、おばけや鬼退治など役になりきって、いろいろな動きを楽しんでいたと思われる(図 20)。本実践でテーマとしている「多様な動き」が、言葉かけの工夫によって幼児に伝わったことで、自ら多様な動きを楽しむ姿が見られるようになったと考える。

(3) 幼児同士のイメージを繋げる援助

① 手立て

戸外遊びの中で幼児と関わったり、動画等の記録を基に一人一人の遊びの様子を把握し、幼児同士が遊びのイメージを共有することができるように、具体物を準備する等の援助を行った。

② 結果

動画等で記録したことで、その場では聞き取ったり、見たりすることができなかった友達との会話、やりとり等の遊びの様子を知ることができた。その中で見られたC児の変容の様子を図 21 にまとめた。

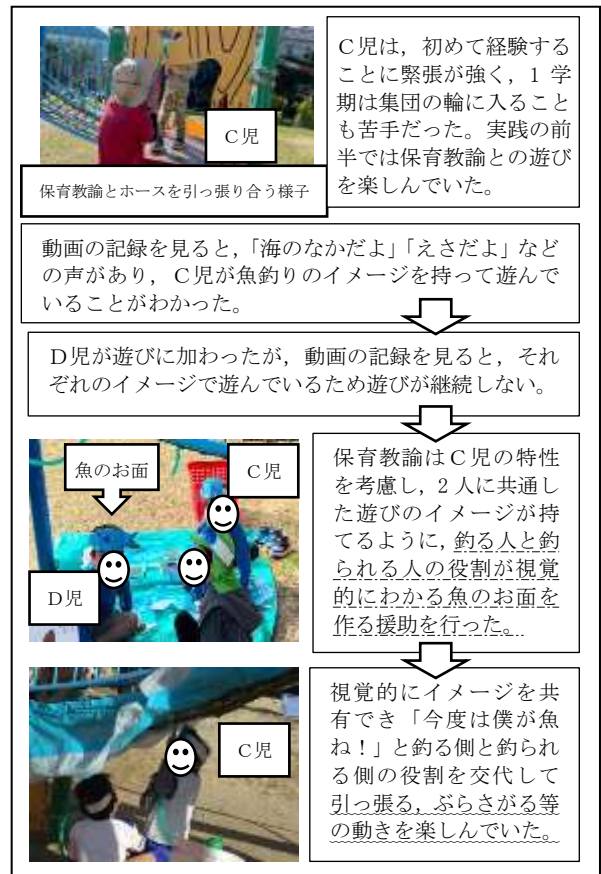


図 21 C児の変容の様子

### ③ 考察

幼児同士が共通の遊びのイメージを持つことができるように、視覚的にわかりやすい具体物を準備して援助を行ったことで、互いのイメージが繋がり、役割を意識した遊びの中で引っ張る、ぶら下がる等の動きを楽しむ姿が見られるようになったと考える(図 21)。このようなことから、戸外遊びを通して一人一人の遊びの様子や特性に応じて具体物を準備するなどの援助を工夫することは、幼児同士がイメージを共有して遊び、多様な動きを楽しむ手立てとして有効であったと考える。

### 3 本研究を通して

本研究の実践の中で、どの子も意欲的に戸外に出て「とうやまランドパーク」の遊びを楽しみ、進んで体を動かしていた。幼児が主体的に遊びを楽しむことが、体を動かすことを楽しむ上で大切であると改めて実感した。実践前と実践後で、多様な動きの観察表を用いて、全体の幼児の戸外遊びにおける体の動きを読み取り比較した結果、実践後には様々な動きが見られるようになった(表9)。これは、本実践で幼児が友達と一緒にイメージを膨らませて遊びを工夫し、その中でいろいろな動きを楽しんでいたからだと思われる。本研究の対象である5歳児がいろいろな動きを経験する為には、体を動かす遊びにおいて、「友達と共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動したり、役割分担して遊ぶようになる」という発達段階に合わせて、環境構成や援助を工夫することが必要であると実感した。このようなことから、幼児が進んで多様な動きを楽しむためには保育教諭が、幼児の主体的な遊びを大切に、年齢や発達段階に応じた遊びを理解して学級や個々の実態に応じて工夫していくことが重要ではないかと考える。

表9 戸外遊びで見られた幼児の体の動き

姿勢・移動系の動き	実践前	実践後	操作系の動き	実践前	実践後
・走る	○	○	・運ぶ	○	○
・登る, 降りる	○	○	・持ち上げる		○
・跳ぶ, 跳びこす	○	○	・積む, のせる		○
・スキップする はねる		○	・押す		○
・すべる	○	○	・投げる	○	○
・乗る	○	○	・掘る		○
・ぶらさがる	○	○	・ひく, ひっぱる		○
・寝転ぶ, 起き上がる		○	・ころがす		○
・くぐる	○	○	・ける		○
・かわす	○	○	・うける, 捕る		
・踏む			・まわす	○	○
・わたる	○	○	・振る, 振り回す		○
・入り込む		○	・ささえる		
・ころがる		○	・うつ		
・はう					

## Ⅹ 研究の成果と課題

### 1 成果

- (1) 幼児のイメージを大切に戸外遊びを工夫したことで、進んで戸外に出て友達と様々な遊びを楽しむようになり、多様な動きの経験に繋げることができた。
- (2) 一人一人の幼児の特性や発達段階を捉え、個に合わせて援助を工夫したことで生き生きと遊びを楽しむようになった。

### 2 課題

- (1) 遊びを展開していく中で、保育教諭の意図を、幼児の主体的な遊びと関連づけながら取り入れる工夫をしていきたい。
- (2) 「とうやまランドパーク」のような遊びを園全体で取り組むことができるように年間指導計画に位置づけていきたい。

#### 【主な参考文献・引用文献】

- ・内閣府 文部科学省 厚生労働省 (2018) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- ・内閣府 文部科学省 (2012) 『幼児期運動指針』 (R3. 11 月閲覧)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/undousisin/1319771.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm)
- ・幼児期運動指針策定委員会 著 (2013) 『幼児期運動指針ガイドブック 毎日、楽しく体を動かすために』 文部科学省
- ・杉原隆 河邊貴子 編著 (2014) 『幼児期における運動発達と運動遊びの指導-遊びのなかで子どもは育つ-』 ミネルヴァ書房
- ・秋田喜代美 他 編著 (2019) 『園庭を豊かな育ちの場に』 ひかりのくに株式会社
- ・吉田伊津美 著 (2022) 『子どもの興味や関心を引き出す運動遊びの援助を考える』 幼児教育じほう 8, 12-18
- ・河邊貴子 田代幸代 編著 (2020) 『遊びが育つ保育〜ごっこ遊びを通して考える』 フレーベル館

〈小学校 特別活動〉

互いのよさを生かして合意形成を図る児童の育成

— 事前の活動の充実と多様な意見の可視化を工夫した話し合い活動を通して —



浦添市立 内間小学校

末吉 増樹

# 目次

I	テーマ設定理由	17
II	目指す子ども像	18
III	研究の目標	18
IV	研究仮説	
1	基本仮説	18
2	作業仮説	18
V	研究構想図	18
VI	研究内容	
1	合意形成について	19
2	互いの意見のよさを生かし合うことについて	19
3	事前の活動の充実	19
4	互いのよさや合意点を見つける可視化の工夫	22
VII	授業実践	
1	検証の計画	23
2	検証授業第1回目	25
3	検証授業第2回目	26
VIII	結果と考察	
1	作業仮説(1)の検証	27
2	作業仮説(2)の検証	30
3	本研究を通じた児童の姿	32
IX	研究の成果と課題	
1	成果	32
2	課題	32
	主な参考・引用文献	32



## 互いのよさを生かして合意形成を図る児童の育成

### 一 事前の活動の充実と多様な意見の可視化を工夫した話し合い活動を通して 一

浦添市立内間小学校 末吉 増樹

#### 【要 約】

本研究は、様々な構成の集団から学校生活を捉え、よりよい集団や学校生活を目指す学級活動（1）において、その中核となる「話し合い活動」とその「事前の活動」に焦点をあて、互いのよさを生かして合意形成を図る児童の育成を目指したものである。

キーワード □合意形成 □互いの意見のよさを生かし合う活動 □事前の活動の充実  
□互いのよさや合意点を見つける可視化の工夫

#### I テーマ提案理由

子ども達が活躍するこれからの社会は、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により社会構造や雇用環境は急速に変化し、ますます予測困難な時代へと変容していくことが予想される。

このような社会にあって、中央教育審議会答申(H28)では、学校教育を通じて子ども達に育みたい資質・能力を「対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝える」ことや、「他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたりする」こと、さらには、「他者への思いやりをもって多様な人々と協働していくことができる」ことと提示している。このような児童を育むためには話し合い活動を中心に様々な構成の集団から学校生活を捉え、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指す特別活動の役割は重要である。

学習指導要領解説特別活動編(H29,以降,解説特別活動編)では、学級活動(1)「ア学級や学校における生活上の諸問題の解決」において合意形成を図っていく手順や方法を身に付け、自分と異なる意見や少数意見も尊重し、折り合いを付けて集団としての意見をまとめる資質・能力を育成することが必要であることが述べられている。そして、それは、異なる意見や考えを基に様々な解決の方法を模索したり、折り合いを付けたりすることが「互いのよさや可能性を發揮する」ことにつながると述べている。特別活動は、集団活動を通して、自主的・実践的

活動を充実させるため、一連の活動を一体的に取り組むことが重要ではあるが、本研究では、学級活動（1）の学習過程における「話し合い活動」とその「事前の活動」に焦点をあて、合意形成を図る研究をしていきたい。

これまでの話し合い活動への取り組みを振り返ってみると、事前の活動の場においては、行事と関連した議題や教師が設定する議題について話し合うことが多く、児童が気づいた問題やみんなで解決したいという思いを議題につなげた話し合い活動が不十分であった。また、意見をまとめる場においては、自分と異なる意見や少数意見を尊重せずに安易に多数決で決定することもあり、みんなが納得した合意形成を図るための手立てに対して難しさを感じていた。

これらの課題解決に向け、学級や学校生活上において、児童にとって必要感のある議題を学級全員で話し合って選定することや合意形成を図る手順や活動の方法を身に付けることが必要である。また、多様な意見を認め合い、互いのよさを生かしながら考え、折り合いを付けて合意形成を図ることが、人間関係形成をよりよくし、学級生活の充実と向上を目指すことにつながると思う。

そこで、本研究では、諸問題の発見と議題選定や合意形成を図る視点を重視した事前の活動の充実と話し合い活動において、板書を活用した可視化の工夫をすることにより、多様な意見を認め合い、互いのよさを生かし合いながら創意工夫して合意形成を図る児童の育成につながると思う、本テーマを設定した。



## II 目指す子ども像

多様な意見を認め合い、互いのよさを生かし合って合意形成を図る児童

## III 研究の目標

話し合い活動において、互いのよさを生かして合意形成を図る児童の育成のために、事前の活動の充実と多様な意見の可視化の工夫について研究する。

## IV 研究仮説

### 1 基本仮説

話し合い活動において、事前の活動の充実と多様な意見の可視化の工夫をすることによって、互いの意見を比べ合い、認め合いながら、よさを生かし合って、合意形成を図る児童の育成が

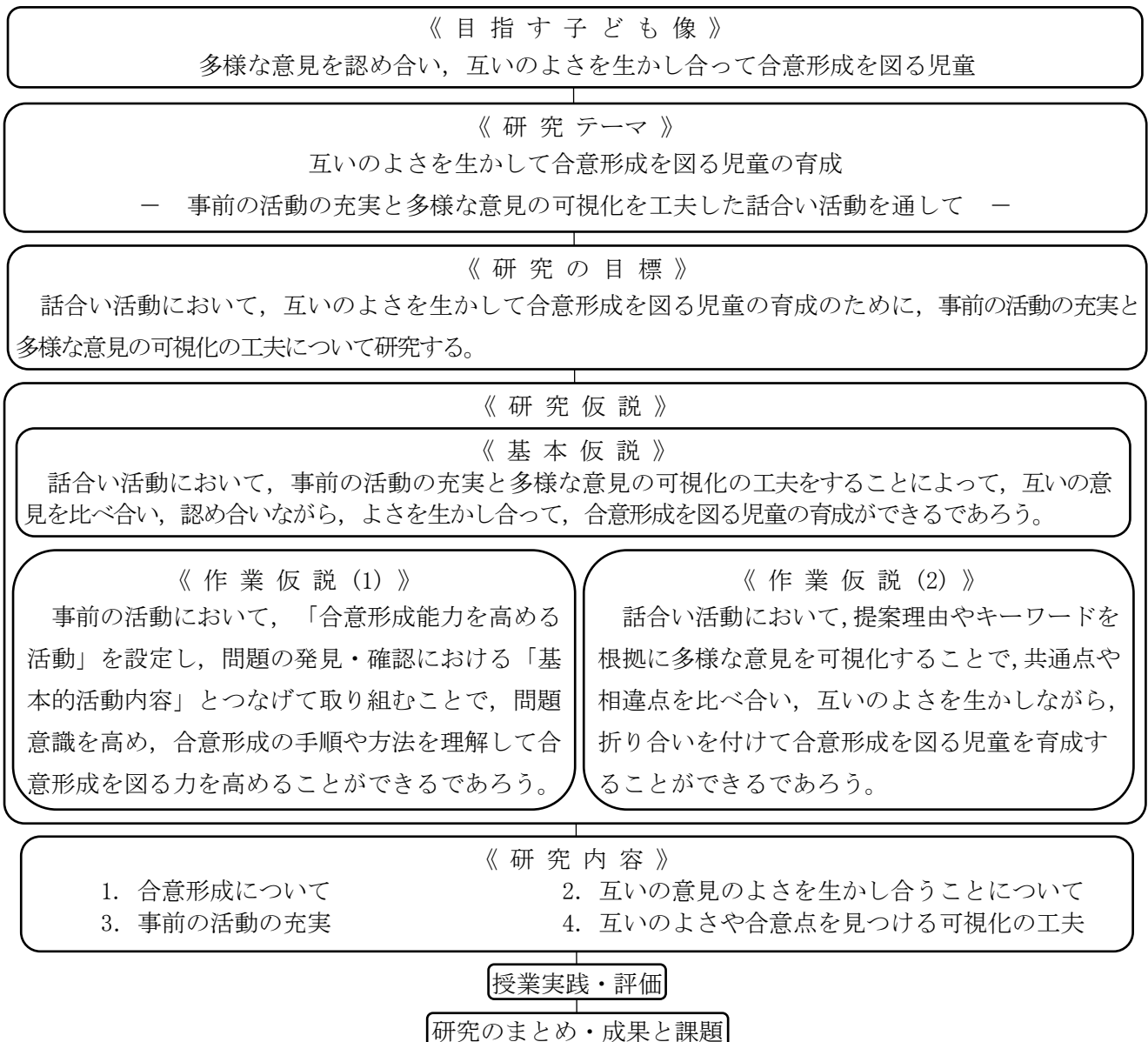
できるであろう。

### 2 作業仮説

(1) 事前の活動において、「合意形成能力を高める活動」を設定し、問題の発見・確認における「基本的活動内容」とつなげて取り組むことで、問題意識を高め、合意形成の手順や方法を理解して合意形成を図る力を高めることができるであろう。

(2) 話し合い活動において、提案理由やキーワードを根拠に多様な意見を可視化することで、共通点や相違点を比べ合い、互いのよさを生かしながら、折り合いを付けて合意形成を図る児童を育成することができるであろう。

## V 研究構想図



## VI 研究内容

### 1 合意形成について

#### (1) 合意形成とは

河村(2018)は、学級活動の話合い活動における合意形成とは、「学級の課題について、個々の子どもが見出した思いを意見として出し合い、互いの意見の違いや多様な考えがあること、それぞれの意見に意味があることを大切に、最もよい解決策をみんなで構築していくこと」と述べている。このことから、合意形成とは相手の立場や考え方を互いに理解し、それらのよさを生かしながら、「自分もよくてみんなもよい」といった合意の過程に納得した上で、集団としての意見をまとめていくことであると捉える。

また、中央教育審議会答申(R3)では、次代を切り拓く子ども達に求められる資質・能力として、「目の前の事象から解決すべき課題を見だし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すこと」が挙げられている。このことから、特別活動における納得解とは、話し合い活動における合意形成と捉える。今後、ますます必要とされる多様な人々との共生社会で生きていく力として、合意形成を図る力は重要度が高いと考える。

#### (2) 合意形成を図る資質・能力について

解説特別活動編(H29)では、学級活動(1)「学級や学校における生活づくりへの参画」における、「ア 学級や学校における生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図り、実践すること」の内容について、児童が合意形成に向けた資質・能力を身に付けていくことで、よりよい合意形成を図る力へつながると考える。そこで、解説特別活動編(H29)をもとに、合意形成を図る資質・能力を「合意形成能力」と設定した(表1)。

表1 合意形成能力

知識及び技能	<u>合意形成の手順や活動の方法を身に付ける。</u>
思考力 判断力 表現力等	<u>課題を見だし、話し合い、<b>多様な意見を認め合い、よさを生かして合意形成を図る。</b></u>
学びに向かう力、人間性等	<u><b>他者と協働しながら学級や学校生活の向上を図ろうとする態度を養う。</b></u>

本研究では、事前の活動において、学級や学校生活をよりよくしようとする問題意識を高め、折り合いを付けて合意形成を図る手順や活動の方法を身に付けることを目指したい。また、話し合い活動において、多様な意見の可視化を工夫することで、共通点や相違点を比べ合い、互いのよさを生かして合意形成を図る児童を育ていきたいと考え、実践に取り組んでいく。

#### 2 互いの意見のよさを生かし合うことについて


特別活動指導資料「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動小学校編(2016,以降,特別活動指導資料)」では、特別活動における「集団や社会の形成者としての見方・考え方」として、「互いのよさを生かすような見方・考え方」と示している。また、「意見のよさを見つけることや多くの意見を生かし合う意識をもちながら話し合うこと」、「意見の背景を聞き合ったり、論点になっていることを中心に話し合ったりすること」で、お互いの意見のよさを合わせた総意に満ちた考えが生まれ、納得できる意見を見つけることにつながると考える。これらのことから、互いの立場に立ってよさを考える活動や互いの意見を高め合う取り組みを設定する。その活動を通して、互いのよさを生かす見方・考え方を働かせ、一人一人を尊重し、互いのよさや可能性を發揮しながら、全員が等しく合意形成に関わることで、協働してよりよい生活を築くことができるようにしたい。

#### 3 事前の活動の充実

杉田(2013)は、「学級会の成否は、事前指導で決まると言っても過言ではない」と述べている。そこで、特別活動指導資料(2016)をもとに、

合意形成の手順や活動の方法に関する知識や技能を身に付けるための「合意形成能力を高める活動内容」を設定し、事前の活動の内容に取り入れ、表2のように示した。

表2 事前の活動の内容の設定項目

事前の活動の内容
<b>(1) 合意形成能力を高める活動内容</b> ①合意形成を図る視点について ②折り合いについて ③自学自習の設定  (情報収集, 質問と回答, よさを見つけ合う等)
<b>(2) 基本的活動内容(問題の発見・確認)</b> ①問題の発見      ②議題の選定(計画委員会) ③議題の決定(学級全員) ④活動計画の作成(計画委員会・提案者) ⑤問題の意識化

本研究では、表2の「合意形成能力を高める活動内容」と「基本的活動内容」をつなげた事前の活動に取り組むことで、よりよい合意形成を図ることを目指す。

(1) 合意形成能力を高める活動内容

- ① 合意形成プロセスを図る視点について  
 特別活動指導資料(2016)では、学級会において、「大切なのは、合意形成に向かうためのプロセス」と示し、合意形成を図るための視点を挙げている(表3)。

表3 合意形成を図る視点

①互いの意見を理解し合う (相手の立場に立って、共感的に理解する) ②何が違うのか明確にする (理由を明確にして比較する) ③見方を考える(視点を考えて比較する)
---

このことから、学級会の各段階における活動の手順や合意形成を図る視点をおさえながら話し合うことが、よりよい合意形成を図ることにつながると考える。

そこで、本研究では、事前の活動において、話し合い活動で参考にする資料を作成し、合意形成を図る視点を学級全体で確認することで、理由や視点を基に比較し、共感的な態度で話し合い、互いのよさを生かしながら折り

合いを付けて合意形成を図ることができる。特別活動指導資料(2016)をもとに、各段階における合意形成プロセスの視点を設定した(表4)。

表4 合意形成プロセスの視点

	合意形成を図る視点	評価
出し合う	★友達の考えを自分の考えと比べながら聞く。 (共通点, 相違点)	
	①理由を明確にして自分の考えを伝える。	
	②質問をして、相手の考えを知る。	
比べ合う	★共通点や相違点を見つけたり、長所や短所を比べながら考える。	
	③お互いの意見のよい所を見つけたり、伝えたりする。	
	④相手の意見へのアドバイスを見つけたり、伝えたりする。	
	⑤提案理由や決まっていることをもとに、意見をしぼる。	
まとめる (決める)	⑥目的に合う「折り合い」を付ける。	
	⑦少数意見を大切に「合意形成」を図る。 ☆「みんなにとっていい、自分にとってもいい」 ☆「自分たちの学級に一番大切なものごと」	

この表を活用し、本時の話し合い活動における合意形成に向けた手順や振り返る場面において、上記の項目をワークシートの振り返りの内容として活用することで、合意形成を図る力が身に付くと考える。

② 折り合いの必要性と方法について

解説特別活動編(H29)では、「集団における合意形成では、同調圧力に流されることなく、批判的思考力を持ち、他者の意見も受け入れつつ自分の考えも主張できるようにすることが大切である。そして、異なる意見や考えを基に、様々な解決の方法を模索したり、折り合いを付けたりすることが、『互いのよさや可能性を發揮しながら』につながる」と述べている。このことから、自分と異なる意見や少数意見も尊重し、多くの意見のよさを生かす折り合いの方法を知ることが、よりよい意見をまとめる「思考力・判断力・表現力等」の育成につながると考える。

特別活動指導資料(2016)では、折り合いを付ける方法が例として示されている。それらの方

法をもとに学級の実態に応じて以下の内容を設定し、事前の活動の資料として作成した(表5)。

表5 折り合いを付ける方法

折り合いを付ける方法
①条件を付ける(付け足し) 「〇〇の意見に、△△を付け加えると、よいと思います。」 「△△の内容が入れば、条件に合うので、〇〇の意見がよい。」
②優先順位を決める 「提案理由や条件に合う優先順位を付けると、学級のみみんなのためになる意見は〇〇の意見が1番よいと思います。」
③新しい考えをつくる 「意見のよさを生かして、新しい意見にしてはどうですか。」 「〇〇の新しい意見にすると、みんなの意見が入るね。」
④少しずつ全部行う 「時間を工夫して両方行うことはどうですか。」 「みんなの意見をまとめて工夫して行うことはどうですか。」
⑤キーワードをもとに決める 「〇〇の意見がキーワードの内容を網羅しているのでよい。」
⑥これまでの経験を振り返って決める 「〇〇の意見は、前に～した経験から、〇〇の方がよい。」

この表を活用し、意見をまとめる場面において、折り合いを付ける方法を見つけ合うことで、話し合いの流れや目的に合った意見にしぼり、よさを生かしながら創意工夫して合意形成を図ることができる。と考える。

### ③ 自学自習の設定

有村(2017)は、「学級会では、自分の意見を大切にすることが必要である」とし、その際、「なぜその意見を大切にしているのか理由を明らかにして、意見を伝える」ことや「自分の経験やこれまでの学級の取組を想起させたり、事前に意見をワークシートにまとめたりするなどの工夫」が必要と述べている。このことから、学級会における議題について、目指す姿に向けたよりよい解決の方策や解決後のイメージをより明確にする場の設定が必要と考える。

また、特別活動指導資料(2016)では、出された意見を理解するために、「質問を通して意見の内容やそこに込められている思いを確認することや、「意見の内容を聞き合うことが、

合意形成を目指す話し合いの基礎」になることを述べている。このことから、個人または小グループで事前に質問する内容や相手が質問してくる内容の予想およびその回答について話し合う時間を設定することで、多様な視点から意見を捉え、比べ合いながら、互いの意見を共感的に理解することにつながると考える。

そこで、基本的活動内容(問題の発見・確認)における問題意識を高める活動において、自分の意見について調べたり、互いへの質問とその回答や相手の意見のよさについて考えたりする自学自習の場を設定することで、自分の意見をより深め、自分と異なる意見や少数意見を尊重できるようにしたい。

### (2) 基本的活動内容(問題の発見・確認)

#### ① 諸問題の発見と議題の選定の工夫

特別活動指導資料(2016)では、諸問題を発見する力を育むためには、「学級会とは何のためにあるのか」、「どのような時間なのか」など、その意義や目的について繰り返し指導を行うことが必要と述べられており、よりよい学級や学校生活づくりに向けた諸問題を見つける視点を示している(表6)。

表6 問題発見の視点

○みんなでしてみたいこと
○学校生活がもっとよくなること
○みんなでつくってみたいこと
○以前の活動の課題になったこと
○みんなにお願いしたいことや、解決したいこと

また、稲垣(2020)は、「議題の選定に力を注ぐことが、子供たちに問題意識をもたせるスタートとして必要」と述べている。これらのことから、児童が学級や学校の生活上の諸問題を「自分たちの課題」と捉え、学級全員で協力して解決できる議題を選定する必要がある。そこで、本研究では、特別活動指導資料(2016)を参考に、児童がよりよい生活づくりに向けた問題発見の視点を示し、今の学級の姿を見つめ、目指す学級に向けて考えられる解決の方法をイメージできる提案カードを作成した(図1)。

提案カード	月	日	名前	
提案します! ( )個人から ( )係から				
提案したいこと ( )みんなでしてみたい。 ( )みんなで学級をよくしたい。 ( )みんなで作ってみたい。				
『提案理由』				
①今の学級の姿	→	②課題を解決すること(理由)	→	③めざす学級の姿
この提案については、 1 学級会で話し合う。 2 委員会や係にお願する。 3 朝の会・帰りの会で話し合いする。 4 先生にお願する。 5 その他 ( )				

図1 議題の提案カード

さらに、望ましい議題の決定につなげるために、議題を整理、選定しやすい表を活用して、学級生活の充実や向上のために、学級全員で必要感のある議題決定の場を設定する(図2)。

議定の視点	学級全員が協力しなければいけない議題	自分たちで工夫し、協力できる議題	学級や学級生活をよりよいものにする議題	多くの児童が早く解決したい議題	議題	どこで解決するか?
出された意見						

図2 議題選定表

#### 4 互いのよさや合意点を見つける可視化の工夫

##### (1) 可視化の有効性

杉田(2020)は、合意形成に必要不可欠なのが個々の意見とその理由、共通の比べ合う視点などが子ども達に一目瞭然で把握できる板書の工夫が大事であるということを述べている。このことから、多様な意見の可視化を工夫することで、話し合いの視点を押さえながら個々の意見の理由を理解し、互いの意見のよさや問題点を見つけたり、共通点や相違点を比べ合ったりして、提案理由に合ったよりよい意見にまとめるための手立てになると考える。

##### (2) 互いのよさを高め合う可視化の工夫

特別活動指導資料(2016)では、よりよい意見を見いだすために、「意見のよさを見つけること」や、「多くの意見を生かし合う意識を持ちながら話し合う」ことで、「お互いの意見のよさを合わせた、創意に満ちた考え」ができる

ことを述べている。そこで、相手の立場に立って意見のよさを見つけるごとに花びら一枚を増やしていく「ハッピーフラワー」の活動を設定することで、互いのよさに目を向け、自分の意見と比べたり、よさを生かして新しい考えを創る思考につながると考える(図3)。

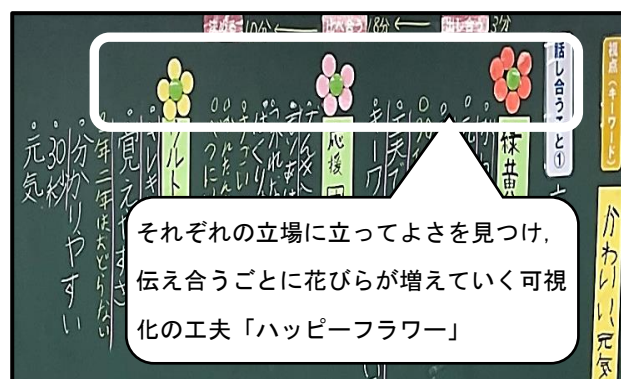


図3 ハッピーフラワー

##### (3) 合意点を見つける可視化の工夫

杉田(2013)は、「児童から出された意見を可視化し、それらを話し合いの流れに即して操作化し、合意形成までの流れがわかるように構造化していく。」と述べている。そこで、本研究では、「①目指す姿や提案理由を基に色別にキーワード化する」、「②出された意見をキーワードごとに色分けする」活動の工夫を通して、共通の視点をもって比べ合うことで、提案理由に合ったよりよい意見にしばることができる。また、それぞれの意見の違いや改善点を見つけやすくなることで、友達の意見にアドバイスを付け足したり、条件を付け足したりするなど、折り合いを付けて合意形成を図ることにつながると考える(図4)。



図4 意見とキーワードをつなぐ可視化の工夫

## Ⅶ 授業実践

### 1 検証の計画

	日程	活動の内容	指導上の留意点	◎目指す児童の姿 【観点】〈評価方法〉
<b>実践1 議題 「学年や学級の団結を深める内間カップをしよう」</b>				
計画委員会★ 全員☆				
学級活動 事前 ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決	11/30 (水) 4校時	☆学級会の意義や進め方について確認する。 ☆計画委員会を選定する。 ★計画委員会の役割分担を決める。	・学級会の役割や合意形成を図ることの意義、方法について確認する。 ★輪番制や各グループの役割分担について確認する。	【知識・技能】 ◎楽しい学級生活をつくるために他者と協働したり、合意形成の手順について理解してる。 〈観察・ワークシート〉
	12/1 (木) 6校時	☆問題発見や議題の選定について確認する。 ★学級会の活動計画を立てる。	・学級、学校生活の充実や向上のための望ましい条件や提案者の思いや願いを大切にしたい議題の選定について確認する。 ・問題発見や議題選定の視点を確認しながら進める。 ★役割分担し、仕事内容を確認する。	◎議題の意義を確認し、めざす姿に向けてこれからみんなで協働して実践していくことを理解している。〈観察〉
	12/6 (火)	☆学級会の議題を選定、確認する。 ★活動計画書や仕事分担、掲示物の準備をする。	・議題選定表を活用して、視点を意識した選定をする。 ・①学級の現状(課題)、②課題の改善策、③目指す学級の姿の視点を確認する。	【知識及び技能】 ◎議題の意義を確認し、めざす姿に向けてこれからみんなで協働して実践していくことを理解している。〈観察〉
	12/8 (木) 5校時	☆出し物について調べよう。 (自学自習)	・目的や提案理由を踏まえて考えるように助言する。 ・目指す学級の姿を確認する。	【学びに向かう力・人間性等】 ◎提案理由や条件をもとに学級の目指す姿を考えて調べている。 〈ワークシート〉
	12/9 (金) 5校時	☆出し物の流れとなる中心の内容を決める。	・目的や提案理由を踏まえて考えるように助言する。 ・目指す学級の姿を確認する。	【思考・判断・表現】 ◎議題について自分の考えをもち、互いの意見のよさを生かしながら、合意形成を図ろうとしている。〈観察〉
	12/12 (月) 5校時	☆学級会ワークシートに自分の考えを書く。 ★全員の学級会ノートを確認して話し合いの準備や仕事内容の確認をする。	・工夫と役割については、 <u>互いのよさの視点</u> をもとに考える。 ★全員の学級会ノートを確認して話し合いの準備や仕事内容の確認をする。シミュレーションする。	【思考・判断・表現】 ◎提案理由や条件に合った自分の考えをもち、話し合いに見通しをもちながら考えている。 〈観察・ワークシート〉
	12/13 (火) 3校時	☆「学年、学級の団結を深める内間カップをしよう」 <u>めあて</u> 互いのよさを生かし合って、合意形成を図ろう。	・目的や提案理由を踏まえ、目指す学級の姿をイメージしながら話し合うことを助言する。	【思考・判断・表現】 ◎解決方法について比べ合い、互いのよさを生かしながら創意工夫して合意形成を図ろうとしている 〈観察・ワークシート〉
	事後 12/14 (水) ～ 12/21 (水)	☆役割分担する。 ☆役割ごとに、具体的な活動計画を立てて協力して準備する ☆全体練習する。	・それぞれの長所を生かして役割を決めるよう助言する。 ・協力し合いながら準備に取りかかるように声かけする。	【学びに向かう力・人間性等】 ◎実践に向けて、役割に協力して取り組んでいる。 〈観察・振り返りシート〉

	12/22 (木) 実践	「内間カップ」 めあて 発表を通して、互いのよさや 頑張りを認め、学年や学級の 団結を深めよう。	・学年集会の目的を確認して、協力 して実践できるように声かけする ・目指す学級の姿を達成に向けた助 言をする。	【学びに向かう力・人間性等】 ◎学年集会の目的を意識し て、協働して取り組もう としている。〈観察〉
	振り返り	☆内間カップの振り返りをす る。 ★振り返りをする。	・自分のよさや互いのよさ、学級の 成長を自覚できるように、視点を もとに振り返る。 ・互いに伝え合い、次の活動につな がるような助言をする。	【学びに向かう力・人間性等】 ◎一連の活動を振り返ること で、互いのよさを認め 合い、次の活動に生かそ うとしている。
<b>実践2 議題 「よさを見つけ合い、みんなが自信をもつ4年3組にしよう」</b>				
計画委員会★ 全員☆				
事前	1/6 (金) 放課後	☆計画委員会の選定する。 ★計画委員会の役割分担をす る。	★輪番制や各グループの役割分担に ついて確認する。	
	1/10 (火) 6校時	☆第二回学級会の議題選定、確 認をする。 ★学級会の活動計画をたてる。 ★掲示物を作成する。	・アンケート結果を通して、自分事 として捉えるよう助言する ・①学級の現状（課題）、②課題の 改善策、③目指す学級の姿の視点 を確認する。 ・キーワードを決める。	【知識及び技能】 ◎議題の意義を確認し、めざ す姿に向けてこれからみ んなで協働して実践して いくことを理解してい る。〈観察〉
	1/11 (水) 5校時	☆第二回学級会の話し合う柱を 決める。 ☆自学自習する。 ☆合意形成の視点を確認する。 ★掲示物作成、シナリオの確認	・目的や提案理由を踏まえて考える ように助言する。 ・目指す学級の姿を確認する。 ★シナリオを計画委員で通読しなが ら確認する。	【学びに向かう力・人間性等】 ◎提案理由や条件をもとに 学級の目指す姿を考えて 調べている。 〈ワークシート〉
	1/12 (木) 5校時	☆学級会ワークシートに自分の 考えを書く。 ★全員の学級会ノートを確認し て話し合いの準備や仕事内容 の確認をする。	・工夫と役割については、互いのよ さの視点をもとに考える。 ★全員の学級会ノートを確認して話 し合いの準備や仕事内容の確認を する。シミュレーションする。	【思考・判断・表現】 ◎提案理由や条件に合った 自分の考えをもち、話し 合いに見通しをもちなが ら考えている。 〈観察・ワークシート〉
	1/13 (金) 2校時	☆「よさを見つけ合い、みんなが 自信をもつ4年3組にしよう」 めあて 互いのよさを生かし合っ て、合意形成を図ろう。 ★振り返りをする。	・目的や提案理由を踏まえ、目指す 学級の姿をイメージしながら話し 合うことを助言する。 ★役割や運営について振り返るよ うに助言する。	【思考・判断・表現】 ◎解決方法について比べ合 い、互いのよさを生かし ながら創意工夫して合意 形成を図ろうとしている 〈観察・ワークシート〉
事後	1/16 (月) ～ 1/17 (火)	☆役割分担する。 ☆役割ごとに、具体的な活動計 画を立てて、協力して準備す る。	・それぞれの長所を生かして役割を 決めるよう助言する。 ・協力し合いながら準備にかか るように声かけする。	【学びに向かう力・人間性等】 ◎実戦に向けて、役割に協 力して取り組んでいる。 〈観察・振り返りシート〉
	1/18 (水) 実践 振り返り	☆「自分のよさを知ろう」 めあて 自分のよさを発表しよう。 ★振り返りをする。	・自分のよさや互いのよさ、学級の 成長を自覚できるように、視点を もとに振り返る。 ・互いに伝え合い、次の活動につな がるような助言をする。	【学びに向かう力・人間性等】 ◎一連の活動を振り返ること で、互いのよさを認め 合い、次の活動に生かそ うとしている。

## 2 検証授業 第1回目（実施日 2022年12月13日）

### (1) 議題「学年、学級の団結を深める内間カップをしよう」


学級活動（1）ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

### (2) 本議題のねらい

○互いの意見のよさを認め合い、折り合いを付けて合意形成を図る。

○目指す学級の姿に向かって、学級で団結してよりより学級を築こうとする態度を育む。

(3) 授業の概要

	児童の活動	指導上の留意点 ○児童の反応 □教師の手立て	◎目指す児童の姿 【観点】(評価方法)																
導入 5分	1 はじめの言葉 2 計画委員会の紹介 3 議題の確認 4 提案理由やめあての確認 5 決まっていることの確認  日時：12月22日(木)2校時 場所：体育館 時間：10分間(出し物) 内容：劇中心  6 キーワードの確認 ①一体感 ②よさを生かす ③練習期間(1週間)  7 先生の話	議題『学年や学級の団結を深める「内間カップ」をしよう』  提案理由 <table border="1"> <thead> <tr> <th>【今の学級】</th> <th>【すること】</th> <th>【目指す姿】</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>・これまでは協力して取り組んできた。が、今はまとまりがない。</td> <td>・合意形成する。 ・内間カップで一致団結して発表する。</td> <td>・一致団結し、互いのよさを生かし合い、笑顔あふれる思い出いっぱい3組。</td> </tr> </tbody> </table> めあて：お互いのよさを生かし合って、合意形成を図ろう。	【今の学級】	【すること】	【目指す姿】	・これまでは協力して取り組んできた。が、今はまとまりがない。	・合意形成する。 ・内間カップで一致団結して発表する。	・一致団結し、互いのよさを生かし合い、笑顔あふれる思い出いっぱい3組。											
【今の学級】	【すること】	【目指す姿】																	
・これまでは協力して取り組んできた。が、今はまとまりがない。	・合意形成する。 ・内間カップで一致団結して発表する。	・一致団結し、互いのよさを生かし合い、笑顔あふれる思い出いっぱい3組。																	
展開 30分	8 話し合い (1)話し合うこと①(15分) 「何を工夫してするか」 ・出し合う ・比べ合う ・決める   図5 板書を確認しながら意見をまとめる様子 (2)話し合うこと② 「どんな役割が必要か」	<table border="1"> <thead> <tr> <th>○合奏</th> <th>○歌</th> <th>○ダンス</th> <th>○クイズ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>○合奏係</td> <td>○歌係</td> <td>○ダンス係</td> <td></td> </tr> <tr> <td>○お笑い係</td> <td>○クイズ係</td> <td>○俳優係</td> <td></td> </tr> <tr> <td>○ナレーター</td> <td>○道具係</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table> □司会が困った時は、方向性を示唆する。 □合奏はピアノが上手な人がいるからできる。 □～を入れるとしたら、どのように入れますか。 □必要に応じて、自分の意見に固執せず、納得したうえで考えを変えるなど、折り合いを付けて合意形成を図ることの大切さについて助言する。 □必要に応じて、納得できない児童に対して、どのような工夫をすれば納得できるか話合うよう助言する。  □それぞれの内容の役割については、事前に短冊に用意しておく。	○合奏	○歌	○ダンス	○クイズ	○合奏係	○歌係	○ダンス係		○お笑い係	○クイズ係	○俳優係		○ナレーター	○道具係			◎これまでの集会活動の経験を生かしたり友達との共通点や相違点を比べながら聞いて出し物の内容や工夫について考えている。  ◎互いのよさを生かしながら、創意工夫して合意形成を図ろうとしている。 【思考・判断・表現】 (観察・発言)
○合奏	○歌	○ダンス	○クイズ																
○合奏係	○歌係	○ダンス係																	
○お笑い係	○クイズ係	○俳優係																	
○ナレーター	○道具係																		
終末 10分	9 決まったことの発表 10 話し合いの振り返り 11 先生の話 12 終わりの言葉	□自分や友達のよさを互いに伝え合う。 □目標が達成できたかどうか確認する。 □①前回の話し合いと比べてよかった点、合意形成したことへの価値付けや称賛、②今後の課題、③計画委員会へのねぎらい、④今後の見通しや実践に向けての意欲付け等について助言する。																	

(4) 板書





3 検証授業 第2回目 (実施日 2023年1月13日)

(1) 議題「よさを見つけ合い、みんなが自信をもつ4年3組にしよう」


学級活動 (1) ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

(2) 本議題のねらい

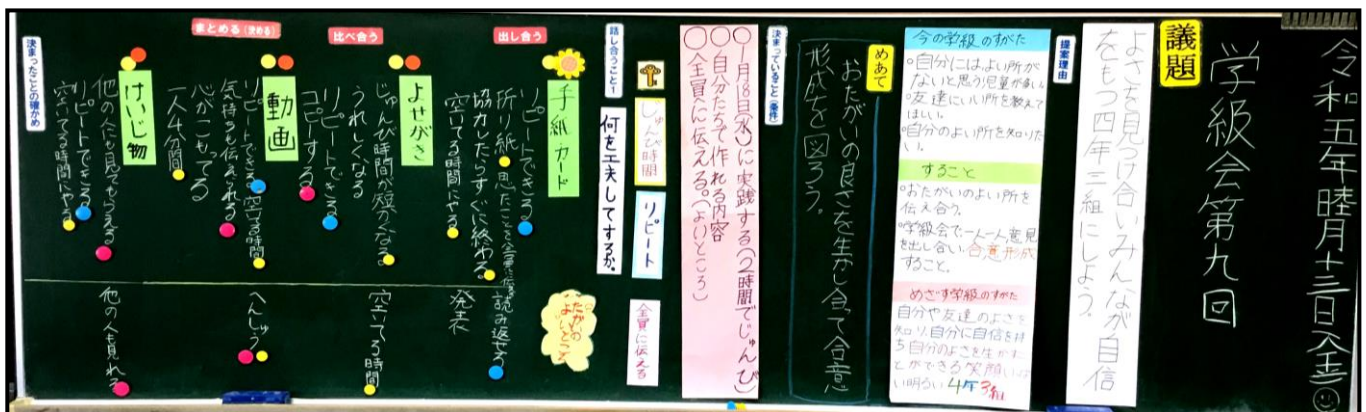
○互いの意見のよさを認め合い、折り合いを付けて合意形成を図る。

○目指す学級の姿に向かって、学級で団結してよりより学級を築こうとする態度を育む。

(3) 授業の概要

	児童の活動	指導上の留意点 ○児童の反応 □教師の手立て	◎目指す児童の姿 【観点】(評価方法)						
導入 5分	1 はじめの言葉 2 計画委員会の紹介 3 議題の確認 4 提案理由やめあての確認 5 決まっていることの確認 日時：1月18日(水) 時間：2時間程度 内容：自分のよさを知ること、自分に自信をもつ。 6 キーワードの確認 ①準備期間(2時間) ②全員に伝える ③リピート 7 先生の話	議題『よさを見つけ合い、みんなが自信をもつ4年3組にしよう』 提案理由 <table border="1"> <thead> <tr> <th>【今の学級】</th> <th>【すること】</th> <th>【目指す姿】</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>・自分にはよい所がないと思う児童が多い。</td> <td>・お互いのよい所を伝え合う。 ・学級会で、一人一人意見を出し合い、合意形成する。</td> <td>・自分や友達のよさを知り、自分に自信もち、自分のよさを生かすことができる笑顔いっぱい4年3組。</td> </tr> </tbody> </table> めあて：お互いのよさを生かし合って、合意形成を図ろう。	【今の学級】	【すること】	【目指す姿】	・自分にはよい所がないと思う児童が多い。	・お互いのよい所を伝え合う。 ・学級会で、一人一人意見を出し合い、合意形成する。	・自分や友達のよさを知り、自分に自信もち、自分のよさを生かすことができる笑顔いっぱい4年3組。	
【今の学級】	【すること】	【目指す姿】							
・自分にはよい所がないと思う児童が多い。	・お互いのよい所を伝え合う。 ・学級会で、一人一人意見を出し合い、合意形成する。	・自分や友達のよさを知り、自分に自信もち、自分のよさを生かすことができる笑顔いっぱい4年3組。							
展開 30分	8 話合い (1)話し合うこと(15分) 「何を工夫してするか」 ①出し合う②比べ合う③決める  図6 ワークシートを確認しながら話し合う様子	例：○手紙・カード ○動画 ○掲示 □司会が困った時は、方向性を示唆する。 □必要に応じて、自分の意見に固執せず、納得したうえで考えを変えるなど、折り合いを付けて合意形成を図ることの大切さについて助言する。 □必要に応じて、納得できない児童に対して、どのような工夫をすれば納得できるか話合うよう助言する。 ○～は、～のキーワードがより多く入っているので、～がいいと思います。	◎それぞれの意見の共通点や相違点をキーワードとともに比べながら考えている。 ◎互いのよさを生かしながら創意工夫して合意形成を図ろうとしている。 【思考・判断・表現】 (観察・発言)						
終末 10分	9 決まったことの発表 10 話合いの振り返り 11 先生の話 12 終わりの言葉	□自分や友達のよさを互いに認め合い、伝え合う。 □目標が達成できたかどうか確認する。 □①前回の話合いと比べてよかった点、合意形成したことへの価値付けや称賛、②今後の課題、③計画委員会へのねぎらい、④今後の見通しや実践に向けての意欲付け等について助言する。							

(4) 板書



## Ⅷ 結果と考察

本研究では、学級活動（1）における合意形成を図る事前の活動の内容と実践1の学級活動（1）「学年や学級の団結を深める『内間カップ』をしよう」、実践2の学級活動（1）「よさを見つけ合い、みんなが自信をもつ4年3組にしよう」の2つの実践を行った。ここでは、事前の活動で学んだことと2つの実践のつながりを踏まえて、具体的な手立てとその結果および考察を中心に述べる。

### 1 作業仮説(1)の検証

事前の活動において、合意形成能力を高める活動を設定し、問題の発見・確認における基本的活動内容とつなげて取り組むことで、問題意識を高め、合意形成の手順や方法を理解して合意形成を図る力を高めることができる。

#### (1) 合意形成能力を高める活動内容

##### ① 手立て

事前の活動において合意形成を図るプロセスの視点を示し、活動の手順をおさえた。学級会における参考資料や事後の意識調査資料として活用した。

##### ② 結果

話合いの流れの各段階における合意形成を図るプロセスの視点の意識調査（4年3組30名対象、以降同様）の結果より、2つの実践の前後で比べると、意見を出し合う段階における「友達の考えを自分の考えを比べながら聞く」ことに関する調査について、「できた・どちらかといえばできた」と答えた児童が28%増えた（図7）。

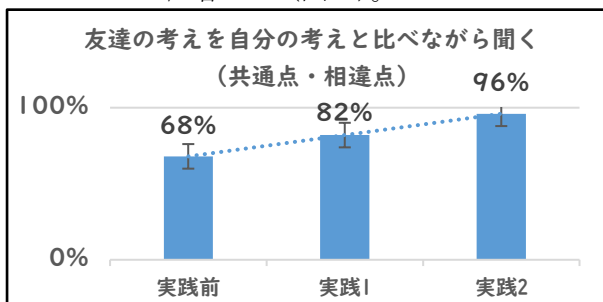


図7 合意形成プロセスの視点

また、意見を比べ合う段階において

も、「意見の共通点や相違点を見つけたり、長所や短所を比べたりしながら考える」ことに関する調査の実践前と実践後では、「できた・どちらかといえばできた」と答えた児童が31%増えた（図8）。

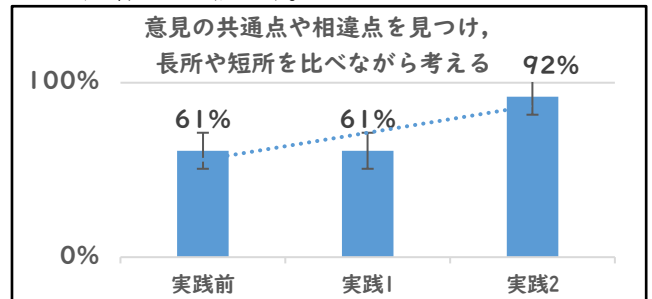


図8 合意形成プロセスの視点

実践1のふり返しにおいて、「合意形成プロセスの視点について理解することができた・どちらかといえばできた」と、88%の児童が肯定的に回答した（図9）。

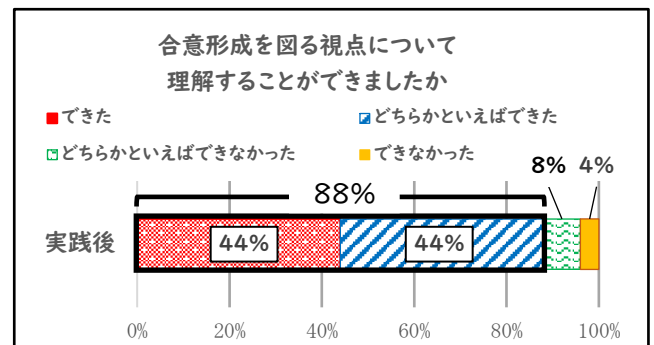


図9 合意形成能力

##### ③ 考察

上記3つの結果から、話合い活動を重ねていくことで、「合意形成を図るプロセスの視点」を理解し、見通しをもって話し合っていることが伺える。

また、話合い活動を計画的、継続的に取り組むことで、合意形成を図る手順や活動の方法を理解し、友達の考えと自分の考えを比較しながら互いの思いを尊重し、よりよい合意形成を図る「知識及び技能」の育成につなげることができた。

#### (2) 折り合いについて

##### ① 手立て

自分と異なる意見や少数意見も尊重し、多くの意見のよさを生かして折り合いを付ける方法を示した。

② 結果

実践1の振り返りシートには、「合体案を出して、少数意見を大切にしたいと思いました。次は、私も少数意見を大切にしたい。」と、折り合いを付けて合意形成を図ろうとする思いが見られた。

また、実践1の意見をまとめる場面の授業記録から、友達のことを尊重し、折り合いを付けて合意形成を図ろうとする児童の様子も見られた(表7)。

表7 意見をまとめる場面の授業記録

★折り合いを付けて、合意形成を図る場面	
S1: 私はダンスをやりたいです。	
S2: 合体していいかわからないけど、 <u>かぶが抜けた時にダンスを入れて合奏で音を加えたらダンスもできる。</u>	友達の思いを工夫して取り入れようとする発言
S3: 劇の途中で合奏とダンスを入れるなら、 <u>最後にクイズをいれても覚えられるし、いいと思う。</u>	少数意見を尊重した発言
S4: クイズを入れるなら合奏の人は合奏、ダンスの人はダンスと <u>3班に分かれてもいいと思う。</u>	少数意見を尊重した折り合いを付ける発言
S1: <u>分担してやったら、いいと思う。</u>	少数意見を尊重した折り合いを付ける発言
S2: 例えば、 <u>楽器は楽器をする。ダンスはダンス、クイズはクイズをすればいいと思う。</u>	考えをつないで、折り合いを付けようとした発言

※吹き出しは、筆者記載

実践1を終え、折り合いについて意識調査した結果、「目的に合う折り合いを見つけたり、見つけようとしたりした」ことに関して、「あてはまる、どちらかといえばあてはまる」と答えた児童は、実践1の後は3%減少したが、実践2の後では15%増えた(図10)。

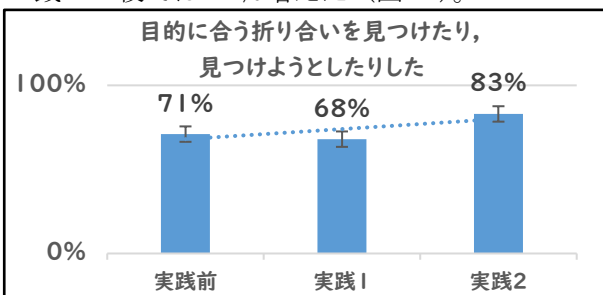


図10 合意形成プロセスの視点

③ 考察

表7を分析すると、「友達の思いを工夫して取り入れようとする」発言や「少数意見を尊重した発言」から、少数意見を尊重し、友達の意見をつないで折り合いを付けようとする児童の思いが伺える。

図10では、実践前と実践1で3%減少した原因は、事前の活動において折り合いの知識を身に付けたことで、これまで「できた」と感じていたことが、「本当にできたのか」と意識が高まったことだと考える。実践1と実践2では、15%の児童が増えた結果から、折り合いを付ける経験を重ねていくことで、合意形成を図る「思考力・判断力・表現力等」の育成につながったと考える。

一方で、教師の発言によって折り合いを妨げる場面があったことから、教師のファシリテーション能力を高めていくことが課題と考える。

(3) 自学自習について

① 手立て

事前の活動において、調べ学習を通して自分の意見をより深めたり、予想される質問への回答や他の意見への質問を考えたり、互いのよさを見つけ合う自学自習の場を設定した。

② 結果

実践1の自学自習の場面では、自分の意見における実践場面を想像することにより、「使える楽器があるか」と、何名かの児童が音楽室へ調べに行く様子が見られた。

また、自学自習のワークシートでは、「ピアノを習っている人から教えてもらおうと、その人のよさを生かすことができると思う」といった、友達のよさを生かして目指す姿を達成しようとする考えが見られた。

事前の活動に関する意識調査では、「議題について自学自習は必要だと思いますか」に関して、96%の児童が必要と肯定的に回答した(図11)。

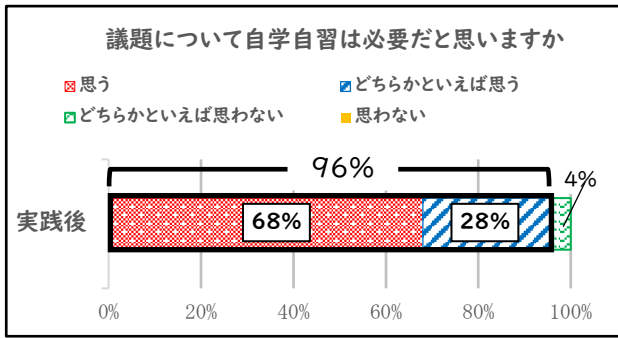


図 11 合意形成能力

③ 考察

自学自習のワークシートや図 11 の意識調査の結果から、児童は実践する自分たちの姿を予想し、これまでの経験を結び付けることで、自分の意見の長所や短所に気づき、より明確な理由や工夫して改善点を見つけようとする考えが深まったと考える。

このことから、事前の活動において、自学自習の場を設定することは、「お互いのよさ」を生かして、合意形成を図ろうとする児童の育成につながったと思われる。

(4) 基本的活動内容

① 手立て

今の学級の姿を見つめ、目指す学級に向けて考えられる解決の方法をイメージする提案カードを活用した。

また、議題設定表を活用して、学級生活の充実や向上のために、学級全員で必要感のある議題の決定の場を設定した。

② 結果

児童が、今の学級の姿を見つめ直し、生活上の諸問題を見つけ、目指す学級に向けて学級全員で解決していきたいと提案が見られた (図 12)。

図 12 提案カード

また、1学期はほとんどの児童が「お楽しみ会」を提案していたが、実践1に向けた提案内容では、今の学級の姿から諸問題を見つけ、目指す学級の姿に向けて学級全員で協力して解決したいという内容が多く見られた (表 8)。

表 8 議題を選定、決定する記録【実践1】

「1学期：学級会提案内容」  
お楽しみ会をしたい。 みんなで遊びたい。等

↓

「実践1 事前の活動：学級会提案内容」  
**今の学級の姿**  
おはじめがない。おしゃべりが多い。集中力がない。  
内間っ子スタイルを守っていない。(規範意識)  
いつも遊ぶ人や話す人が同じ。  
男女があまり話さない。 団結力がない。等

**目指す学級の姿**  
学級目標を達成したい。(協力、助け合い、仲よく)  
笑顔すてきな、4年3組をめざしたい。  
みんなと触れ合って交流したい。  
みんなが自分のよさを知り、生かすことができる。  
自分の意見が言えるクラスにしたい。

議題を決定する場において、「学級や学校生活をよりよいものにする議題」、「多くの児童が早く解決したい議題」に視点をあてながら他の議題案との違いを明確に示し、全員の了承を得て議題選定することができた。議題として取り上げられなかった提案内容にも解決方法や次の議題へつなげたりすることができた (図 13)。

選定の視点	学級全員が協力しなければいけない議題	自分たちで工夫し、協力できる議題	学級や学校生活をよりよいものにする議題	多くの児童が早く解決したい議題	議題	どこで解決するか？
出された意見						
内間っ子	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	12月の学級の議題にしたい
お楽しみ会	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>			<input checked="" type="radio"/>	3月の議題にしたい
大縄大会	<input type="radio"/>					先生と体育係にお願いする。
休み時間の遊び		<input type="radio"/>				先生にお願する。
互いのよさを伝え、自信をもつ		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		<input checked="" type="radio"/>	1月の学級の議題にしたい

図 13 議題選定表

合意形成能力に関する意識調査において、「問題の発見や議題の選定について理解」に関する意識調査では、「できた・どちらかといえばできた」と、88%の児童が肯定的に回答した (図 14)。

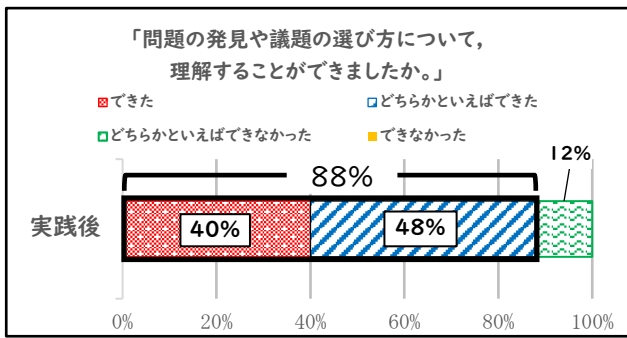


図 14 合意形成能力

### ③ 考察

児童の提案内容や議題選定の様子から、問題発見や望ましい議題を選定する視点を意識して今の学級の姿をふり返ることで、「学級生活をもっとよくしたい」、「早く解決したい」と自分たちの課題として捉えていることが伺える。

また、学級生活の充実や向上のために学級全員で協力して目指す姿を達成したいという思いの表れだと考える。

## 2 作業仮説(2)の検証

話し合い活動において、提案理由やキーワードを根拠に多様な意見を可視化することで、共通点や相違点を比べ合い、互いのよさを生かしながら、折り合いを付けて合意形成を図る児童を育成することができるであろう。

### (1) 互いのよさを高め合う可視化の工夫

#### ① 手立て

意見を出し合う段階において、相手の立場に立って意見のよさを見つけるごとに花びら一枚を増やしていく「ハッピーフラワー」の活動を設定した。

#### ② 結果

実践1の互いの意見のよさを見つける場面の板書(図15)や授業記録(表9)から、実践場面を想像しながらキーワードとつなげたよさや友達の特技に着目しながらキーワードとつなげたよさを伝える児童が見られた。

一方で、意見のよさへの偏りが見られ、互いの意見のハッピーフラワーを十分に咲かせることはできなかった。

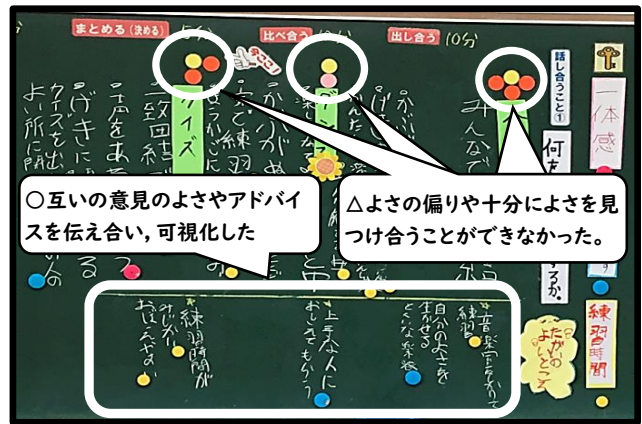


図 15 検証1の意見を可視化した板書

表 9 よさを伝え合う場面の授業記録

### ★よさを伝え合う話し合いの様子

S1: 「クイズ」は覚えたら簡単で、一週間の練習時間でもいろんなクイズが考えられる。

キーワードにつなげてよさを見つけた発言

S2: 「ダンス」は、かぶが抜けたらうれしいから、「ダンス」をやったら一体感がでる。

実際の場面を想像しながら、キーワードとつなげた発言

S3: 「ダンス」は、ダンスが上手な人がいるので、教えてもらったら練習時間も短縮できる。

友達のよさに着目し、キーワードにつなげた発言

※吹き出しは、筆者記載

実践1の学級会を終え、「ハッピーフラワーの活動は必要だと思いますか」に関する意識調査では、「必要・どちらかといえば必要」と、100%の児童が回答した。理由としては、折り合いや合意形成を図ることに肯定的な意見が見られた(表10)。

表 10 ハッピーフラワーの活動について

○みんなの意見により所があると自信をもって言える。  
○相手のよい所を言うと、相手が納得できて合意形成ができる。

○互いのよさを見つけて、新しい考えができる。

○互いのよさを知ること、相手の立場になれる。

### ③ 考察

表9や表10から、多くの意見を生かし合おうとする意識や相手の立場に立って共感的に理解して、みんなが納得できる合意形成を図ろうとする意識の向上につながったと考える。

図15から、意見のよさの偏りや十分にハッピーフラワーを咲かせることができなかった理由は、意見を出し合う場において、設定理

由やキーワードを根拠としたよさを十分に出し合っていたことや、それぞれの意見の共通点や相違点を明確にすることができなかつたことで、互いの意見をよりよくするアドバイスを付け足したよさを見つけることにつながらなかつたと思われる。

これらのことから、「視点を変えて比較する」力や自分の意見と比べながら、「互いのよさを生かしてよりよい考えを創る」力を高めていくために、必要に応じた教師の指導や助言、様々な議題による話し合いを積み重ねていくことが必要と考える。

## (2) 合意点を見つける可視化の工夫

### ① 手立て

意見をまとめる場面において、目指す姿や提案理由を基にキーワード化し、色で区別したり(図16では色を文字やパターンで表している)、出された意見をキーワード毎に区別したりする可視化の工夫をした。

### ② 結果

実践2の本時における意見をまとめる場面では、学級の目指す姿や解決後のイメージをした発言をもとに、議題に対する意見への思いや相手意識をもって意見を伝え合う様子が見られた。また、司会による提案理由に合った意見にしばる発言や児童の経験を踏まえた発言から、折り合いを付けて合意形成を図ることができた(図16)。

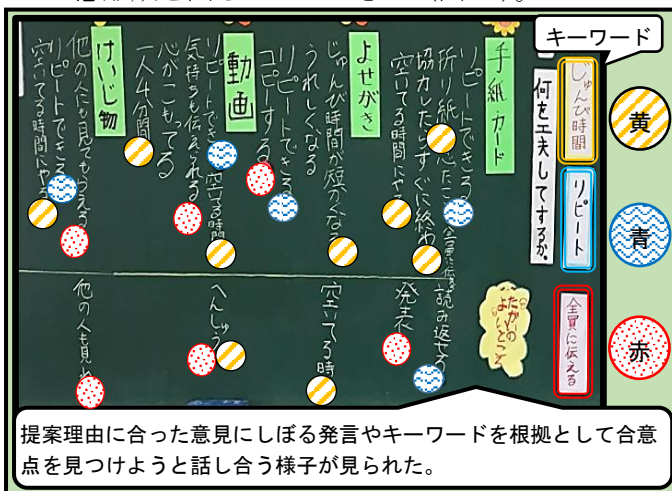


図16 合意点を見つける可視化した板書  
実践2の本時における意見をまとめる場

面の授業記録から、目指す姿に向けたよりよい解決の方策や解決後のイメージをして意見を伝え合っていることが伺えた(表11)。

表11 意見をしばり、まとめる場面の授業記録

★合意形成を図るまでの話し合いの様子	
S1: 私は手紙カードがいいと思います。例えば休みの日は・・・動画(iPad)は、 <u>休みとかに持ち帰らないと見れないから</u> です。	キーワードを意識した発言
S2: 私は、 <u>掲示物</u> がいいと思います。掲示物してあれば、いつでも <u>リポート</u> できると思う。	
S3: 私は <u>寄せ書き</u> がいいです。動画(ipad)だったら、6年生までしか見れない。寄せ書きなら、 <u>何年後でも残るからいい</u> と思う。	解決後をイメージした発言
S1: 掲示物なら、学校に掲示しているの <u>で休みの日に見れない</u> と思う。	解決後をイメージした発言
S4: 寄せ書きだと、全員に伝えることができないけど、 <u>コピー</u> をしてみんなにあげれば、 <u>全員に伝える</u> ことができると思う。	キーワードを意識した発言
S1: 寄せ書きだとみんなで書くから、 <u>書く量を減らさない</u> と・・・手紙カードだ <u>と思ったことを結構書ける</u> 。	経験を踏まえた発言
	相手意識をもった発言
S1: 寄せ書きは <u>コピー</u> したら <u>文字が途切れちゃう</u> こともある。 <u>手紙カード</u> に一人一人のよさを書いて <u>発表すれば全員に伝えられる</u> から手紙カードがいいと思う。	
	足りないキーワードを加える発言

※吹き出しは、筆者記載

実践2を終え、「提案理由や決まっていることをもとに意見をしばることができた・どちらかといえばできた」ことに関する意識調査では、実践前と実践2では、42%の児童が増えた(図17)。

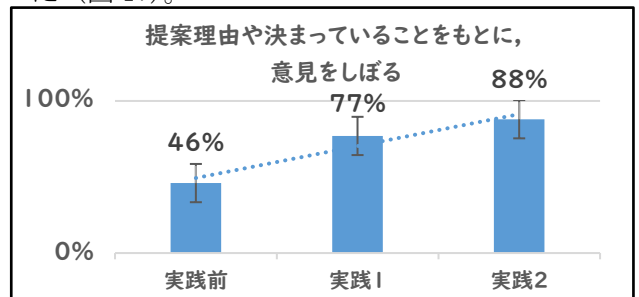


図17 合意形成プロセスの視点

### ③ 考察

板書や授業記録の分析から、多様な意見を可視化することで、互いの意見の共通点や相違点に着目し、キーワードを根拠に工夫点や

改善点を出し合いながら、合意点を見つける話し合い活動につながったと思われる。また、図 17 から、話し合い活動を重ねていくことで合意形成を図る「思考力・判断力・表現力等」の育成につながったことが伺える。

これらのことから、意見をまとめる場において、出された意見をキーワード毎に区別した可視化の工夫は、合意点を見つける手立てとして有効であると考えられる。

### 3 本研究を通じた児童の姿

話し合い活動において合意形成を図ることで、事後の活動や振り返りから、さまざまな児童の姿が見られた（表 12）。

表 12 事後の活動から見られる児童の姿

<p>1. 実践に向けた準備の活動における児童の姿</p> <p>○互いの思いやよさを尊重しながら話し合って役割分担したり、練習に協働して取り組んだりしている姿 ○休み時間や放課後、家で自主練習している姿</p> <p style="text-align: center;">★主体性を持ち、様々な場において合意形成を図る姿</p>
<p>2. 一連の活動の振り返り・・・ワークシートより</p> <p>○「最初は軽い気持ちだったけど、どんどん真剣になっていく」 ○「決めたことに必死に練習するのが4年3組のよさ」 ○「みんなで協力すれば、一致団結して達成できる」</p> <p style="text-align: center;">★自分の気持ちの変容に気付く児童や、学級の成長や次の活動への意識や課題解決に生かそうとする姿</p>
<p>3. 意見が通らなかった児童</p> <p>○「意見が通らずに苦しかったけど、みんなと一緒に協力してできたから、楽しい」</p> <p style="text-align: center;">★学級で協力して楽しい学級生活にしたいと思う姿</p>
<p>○は児童の様子や感想    ★は教師が感じた児童の姿</p>

実践前に実施された意識調査（全校児童対象）では「学校は楽しいですか」の質問に80%の児童が「楽しい、どちらかといえば楽しい」と答えたが、実践後は、100%となった（図 18）。

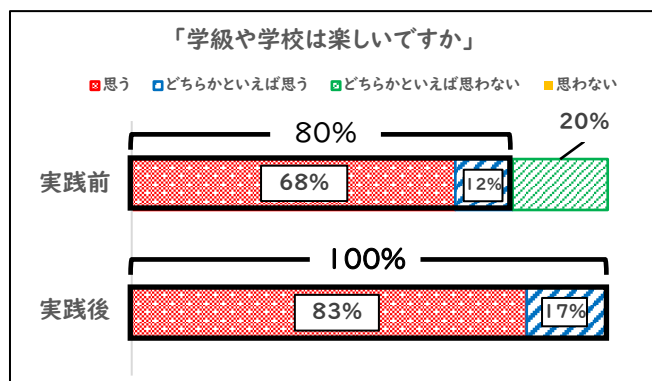


図 18 「学級や学校」について

これらのことから、一連の活動を通して、互いのよさを生かして合意形成を図り、他者と協働することで、学級や学校生活の向上を図ろうとする児童の育成につながると考える。

## Ⅹ 研究の成果と課題

### 1 成果

- (1) 事前の活動において、合意形成能力を高めることは、問題意識をもち、合意形成の手順や方法を理解して合意形成を図ろうとする児童の育成につながった。
- (2) 多様な意見の可視化の工夫をすることで、キーワードを根拠に比べ合い、互いのよさを生かして合意形成を図ることにつながった。

### 2 課題

- (1) 合意形成を図る知識は高まっているが、十分に活用するには、系統性を踏まえながら話し合いの経験と振り返りを積み重ねていくことが必要である。
- (2) 合意形成を図るプロセスにおいて、教師のファシリテーターとしてのスキルを高める必要がある。

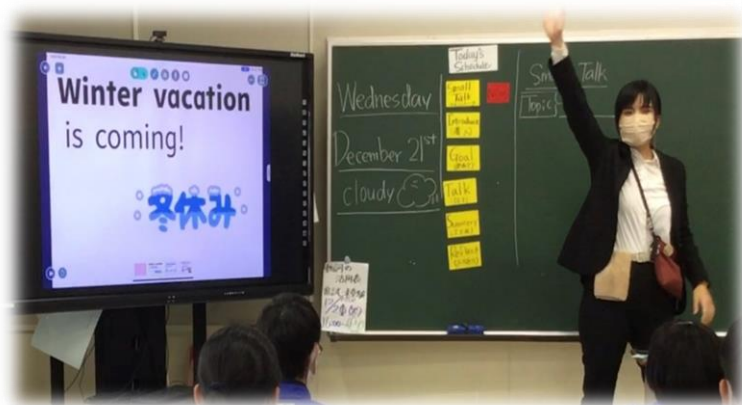
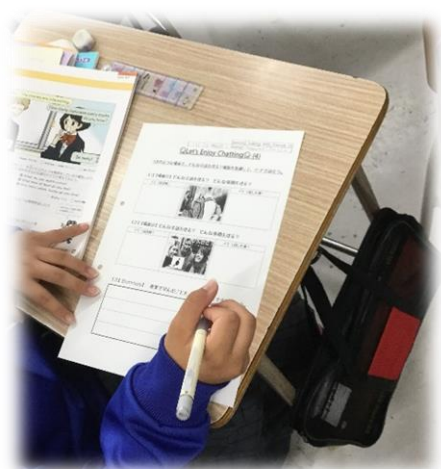
### 【主な参考・引用文献】

- ・ 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 東洋館出版社
- ・ 中央教育審議会（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）』（R4.11月閲覧）<https://www.bunkei.co.jp/kaitei/images/chukyoshin2017.pdf>
- ・ 中央教育審議会答申（2022）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』（R4.11月閲覧）[https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf)
- ・ 文部科学省／国立教育政策研究所 教育課程センター（2019）『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』 株式会社 文溪堂
- ・ 河村茂雄（2018）『特別活動の理論と実際』 株式会社図書文化社
- ・ 杉田洋（2017）『小学校新学習指導要領 ポイント総整理』 東洋館出版社
- ・ 杉田洋（2013）『自分を鍛え、集団を創る！ 特別活動の教育技術』 小学館
- ・ 有村久春（2017）『小学校教育課程実践講座 特別活動』 株式会社ぎょうせい
- ・ 杉田洋・稲垣孝章（2020）『特別活動で、日本の教育が変わる！ 特活力で、自己肯定感を高める』 株式会社小学館

〈中学校 外国語科〉

## 主体的に英語で考えや気持ちを伝え合う生徒の育成

—目的や場面、状況等に応じた「話すこと[やり取り]」の指導の工夫を通して—



浦添市立神森中学校 根間 こずえ



# 目次

I	テーマ設定理由	33
II	目指す子ども像	34
III	研究の目標	34
IV	研究仮説	34
1	基本仮説	34
2	作業仮説	34
V	研究構想図	34
VI	研究内容	35
1	主体的に考えや気持ちを伝え合うこと	35
2	目的や場面、状況用について	35
3	Small Talk の充実	36
4	中間指導の工夫	38
5	パフォーマンスによる評価	38
VII	授業実践	39
1	単元名	39
2	単元の目標	39
3	単元について	39
4	単元の評価規準	40
5	単元の指導と評価の計画	40
6	単元末におけるパフォーマンステストとそのルーブリック	40
7	本時の学習	41
VIII	結果の考察	43
1	作業仮説(1)の検証	43
2	作業仮説(2)の検証	46
IX	成果と課題	48
1	成果	48
2	課題	48
	主な参考・引用文献	48

主体的に英語で考えや気持ちを伝え合う生徒の育成  
—目的や場面、状況等に応じた「話すこと[やり取り]」の指導の工夫を通して—

浦添市立神森中学校 根間 こそえ

【要約】

本研究は、「話すこと[やり取り]」の領域において、対話の目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちを主体的に伝え合うことを楽しむことができるよう指導の工夫を行う。Small Talk や中間指導の充実などを通して、生徒が主体的に考えや気持ちをやり取りできるようになることを目指す。

キーワード □「話すこと[やり取り]」 □目的や場面、状況等 □Small Talk □中間指導

I 主題設定の理由

私たちの生きる社会は急速な技術革新や情報化、グローバル化に伴い、価値観の多様化や社会構造の変化に直面している。このことで、互いの情報を共有するのに必要な英語は、国際言語としてますます重要性を増している。

「中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説外国語編」(以降、解説外国語編)の総説における改訂の趣旨に、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされる」と述べられている。したがって、これからの変化の激しい社会を生きる人々にとって、多様な価値観や文化的背景を持つ人々と、主体的に関わり、協働するために、外国語によるコミュニケーション能力がますます必要となっていく。

中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(H28)において、外国語科における「対話的な学び」の実現に向けて「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、他者を尊重しながら対話が図られるような言語活動を行う学習場면을計画的に設けること」と示されている。子どもたちが将来様々な場面で多様な人々と関わっていく力を育てるために、英語の授業においては実際にやり取りを行う言語活動を一層重視し、英語を用いてコミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて考えやその理由などを伝え合うこと、そのような活動を通して自

分の知識や情報の深まり、自己の考えを深める経験を積むことが求められている。

これまでの授業実践を振り返ると、決められたパターンで繰り返し言ったり話したりすることに積極的に取り組める生徒は多い。一方で、英語を話す活動やパフォーマンステストを行った際、複数の生徒が「単語を覚えることが足りなかった」「覚えてきたことを言えなかった」などと振り返っていた。このように、与えられた場面等に応じて自らの考えやその理由を表現したり、伝え合ったりすることに苦手意識を感じ、目的や場面、状況等に応じたコミュニケーションに到達しきれない生徒がいる。その要因として、言語使用の正しさなど知識・技能の指導や評価に偏っていたことが考えられる。そのため、目的や場面、状況等に応じて、これまでの学習や経験、新たな学習事項などを活かし主体的に考えや気持ちを伝え合うことができるようにするための指導の工夫が必要であると考え

る。そこで、本研究では、目的や場面、状況等を設定した「話すこと[やり取り]」の活動を通して、主体的に他者と自分の考えを伝え合おうとする生徒の育成を目指す。そのための指導の工夫として、表現の定着や対話の継続に慣れるための Small Talk や、生徒自身の気づきを促すための言語活動間の指導などの手立てを行う。このような活動や手立てを通して、生徒が英語を使う目的や場面、状況等に応じてやり取りを行うことを楽しむことができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

## II 目指す子ども像

学んだことや経験を活かしながら主体的に考え、他者との英語でのやり取りを楽しむ生徒

## III 研究の目標

目的や場面、状況等に応じて、主体的に考え、情報を整理し、英語で考えや気持ちを伝え合おうとする生徒を育成する。

## IV 研究仮説

### 1 基本仮説

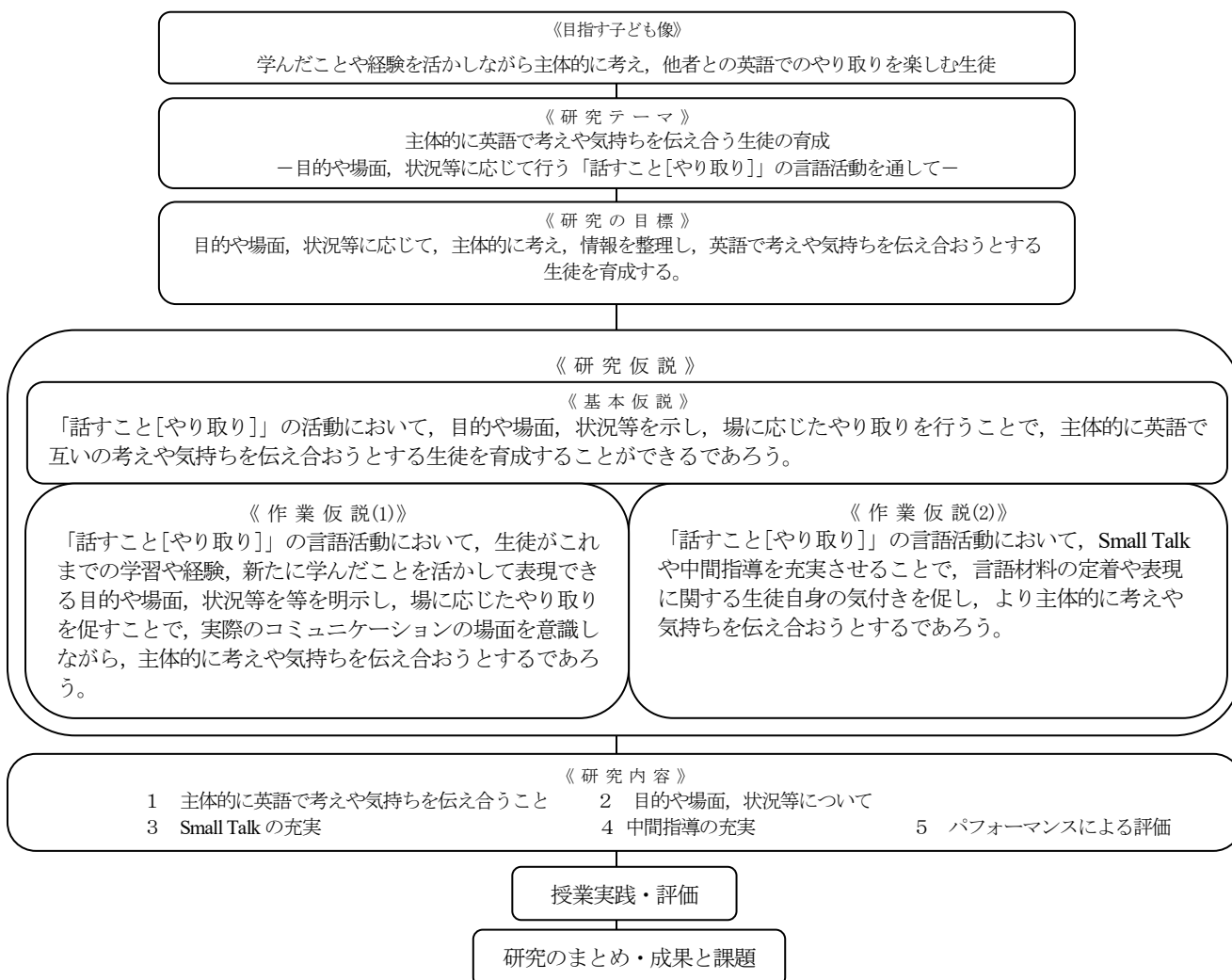
「話すこと[やり取り]」の活動において、目的や場面、状況等を示し、場に応じたやり取りを行うことで、主体的に英語で互いの考えや気持ちを伝え合おうとする生徒を育成することができるであろう。

## 2 作業仮説

(1) 「話すこと [やり取り]」の言語活動において、生徒がこれまでの学習や経験、新たに学んだことを活かして表現できる目的や場面、状況等を明示し、場に応じたやり取りを促すことで、実際のコミュニケーションの場面を意識しながら、主体的に考えや気持ちを伝え合おうとするであろう。

(2) 「話すこと [やり取り]」の言語活動において、Small Talk や中間指導を充実させることで、言語材料の定着や表現に関する生徒自身の気づきを促し、より主体的に考えや気持ちを伝え合おうとするであろう。

## V 研究構想図



## VI 研究内容

### 1 主体的に英語で考えや気持ちを伝え合うこと

#### (1) 主体的にコミュニケーションを図ること

グローバル化の進展により、国内外への人やモノ、情報の行き来がますます盛んになっている。文部科学省(H26)は、「現在学校で学ぶ児童生徒が卒業して社会で活躍する2050年頃には、国民一人一人が、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが想定される」と提言している。吉田(2020)は、グローバル化などの社会の変化に伴い、日本の英語教育は「Fish Bowl Model(金魚鉢モデル)」から「Open Seas Model(大海モデル)」へと転換していく必要があることを掲げている。表1は、吉田(2020)を参考に筆者がまとめたものである。

表1 Fish Bowl Model と Open Sea Model

Fish Bowl Model(金魚鉢モデル) ＝従来の英語教育	Open Seas Model(大海モデル) ＝いま求められる英語教育
<ul style="list-style-type: none"> <li>・誰かに世話をしてもらい →教師が必要なものを与える</li> <li>・不純物は取り除かれる →誤りは許されない →ネイティブの英語でなければ誤りとされる</li> <li>・魚は人工的な環境なら生きていけるが、一歩外に出たら生きていくのは難しい →テストや入試のためだけに学んだ英語が、それ以外で役に立たないかも知れない</li> </ul> <p>これまでの英語教育では、英語の知識は身につくが、運用力はつかない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者に依存せず、自らの力で生きていかなければならない→自主性</li> <li>・絶えず変わる水質に自ら適用していく必要がある→変化への適応</li> <li>・間違いは許容される</li> <li>・他の魚と共存していく →多様性</li> </ul> <p>これからの社会では、生徒が自らの力で、現実の世界の中で英語を使って生きていくことができるような英語教育が求められている。</p>

生徒たちは、「金魚鉢」の中のように限定的で常に世話をしてもらえ環境ではなく、価値観や文化的背景が異なる多様な人々が混在する「大海」のような広い社会において、自ら進んで他者と向き合い、関わり、協働していく必要がある。そのために、英語を用いて主体的に他者とコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することは重要であると言える。

本研究では、変化の激しい社会の中で、

未知の場面や初めての相手とでも自ら進んで関わり、互いを受け入れ、協働していこうとする生徒を育成するための「話すこと[やり取り]」の活動の工夫を行う。

#### (2) 英語で考えや気持ちを伝え合うこと

言語は、考えや気持ち、情報などを伝える手段であり、解説外国語編においても「互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視することが求められる」ことや「特に他者とのコミュニケーションに焦点を当てて指導することが重要である」ことが述べられている。このことから、英語で言われたことを理解したり、自分のことを表現したりという単方向のコミュニケーションにとどまらず、英語で伝え合う」という双方向のコミュニケーションを重視する必要があると言える。

本研究では、主体的に英語を使って自分の考えや気持ちを互いに伝え合う活動を実践するにあたって、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等の工夫、Small Talkの工夫、またそれらをより充実させるための中間指導の工夫を行う。

### 2 目的や場面、状況等について

新学習指導要領の外国語教育において、「目的や場面、状況等」は重要なキーワードの一つである。解説外国語編によると「目的や場面、状況等」とは「コミュニケーションを行うことによって達成しようとする目的、話し手や聞き手を含む発話の場面、コミュニケーションを行う相手との関係性やコミュニケーションを行う際の環境」である。

解説外国語編における外国語教育の目標には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせて(中略)コミュニケーションを図る資質・能力を育成する。」と示されている。「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状

況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」である。(解説外国語編, H29)。山田(2022)は、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方について、図1のように示している。

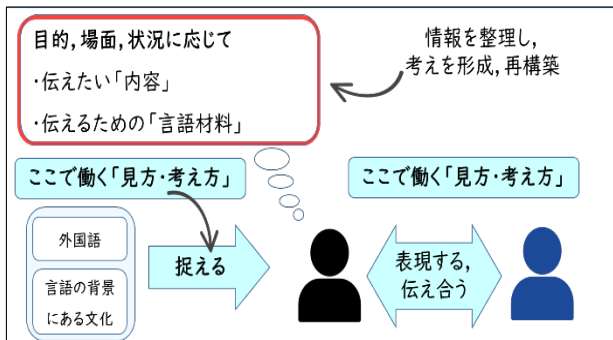


図1 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方(イメージ図) (出典 山田, 2022)

このことから、英語を用いて主体的に他者とコミュニケーションを図る上では、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を生徒が理解した上で考えを整理し、考えや気持ちを伝え合うことが必要であると言える。

(1) 「主体的に英語で考えや気持ちを伝え合う」こととの関連

酒井(2021)は、目的や場面、状況等を設定して行うコミュニケーションの意義について「目的意識を持つことによって、主体的に学習に取り組むことができる」ことを述べている。つまり、「誰に、何を、何のために伝えるか」という意識を持ってコミュニケーションに向かうことで、生徒自身が見通しをもったり方向性を決めたりして言語活動に取り組むことに繋がると言える。

また、山田(2022)は、言語を使って何を伝え合わせたいのかという「内容」を重視することの重要性について「言語材料を習得させてから活動させるのではなく、当該言語材料の自然な使用場面を提示した上で言語活動を展開すること、すなわち『内容が先、英語は後』という指導観を持つ事が大切である」ことを述べている。これらのことから、主体的に英語で相手と考えや気持ちを伝え合おうとする態度を育てるために、生徒たちが自然と英語を用いて表現し

たくなるような、あるいはその必然性を感じるような「目的や場面、状況等」の設定が肝要であると考えられる。

(2) 目的や場面、状況等に応じた言語活動

山田(2022)は、解説外国語編をもとに、言語活動とは「知識及び技能を活用し、思考力・判断力・表現力等を育成するために取りまわせるもの」と述べている。とりわけ、「話すこと[やり取り]」の言語活動は、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等などに応じて、考えなどを形成し、それを表現する活動」であるとしている。授業者は、言語を何のために使うのか、どのような場面で、どのような相手に対して使うのかを吟味した上で、目的や場面、状況等を設定し、言語活動を展開する必要があると言える。そこで、授業実践では生徒達にとって身近な目的や場面、状況等を提示し、表現したい内容を考え、整理した上でやり取りに臨めるよう工夫する。

3 Small Talk の充実

(1) Small Talk とは

文部科学省の「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」(H29, 以降 外国語ガイドブック)によると、外国語の授業における Small Talk とは「帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすること」である。外国語ガイドブックによると、Small Talk の目的は「(1)既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、(2)対話の続け方を指導すること」の2点である。Small Talk の取り組みを積み重ね、表現の定着を図ることで、言語使用の目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながらやり取りを楽しむことに繋がるだろうと考える。

以下の表2は、文部科学省の「中学校外国語：移行期間における指導資料(中学校外国語科)」(2017, 以降 移行期間指導資料)を参考に Small Talk 指導に関する五つのポイントをまとめたものである。

表2 Small Talk 指導のポイント

1. 内容重視	・身近な話題の中で、自分自身の考えや気持ちなどを伝え合わせる。 ・教師も自分自身のことを英語で伝える。やり取りを楽しむ。
2. 対話の継続	対話を継続することができるような表現を段階的に使わせていく。
3. 既習表現の活用	伝えたいことを伝えることができるよう、既習表現を想起させる指導を行う。
4. 指導過程	「活動→指導→活動」の過程で指導する。
5. 指導観	指導の成果が出てくるのには時間がかかることを理解し、継続して指導を行う。フォーマットを暗記させるなど、その場限りのパフォーマンスを求める指導はしない。

本研究では、授業冒頭の10分程度の時間を使って、単元を通してのSmall Talkの充実を図る。表3は、移行期間指導資料と瀧沢(2022)の例を参考に、筆者が作成したものである。本研究ではこの例をもとに、Small Talkの実践を行う。

表3 Small Talk の実践例

活動	発話例(T:教師 S:生徒)	指導上の留意点
①Teacher Talk	T: How was your weekend? Well, I went to ●● and ate △△. I had a great time there. Did you have a good weekend?(全体へ呼びかけ) S: Yes! T: Sounds nice! What did you do? S: え〜と… I play baseball. T: Oh, you played baseball. How about you? (以下、数名の生徒とやり取りを行う)	・話題の提供、語彙への意識付け ・既習事項との関連をもたせる ・教師と生徒との双方向性のあるやり取りとなるよう留意する
②Small Talk(1回目)	S1: Did you enjoy your weekend? S2: Yes. S1: What did you do? S2: Baseball. S1: Uh...At school?	・教師は、机間指導を行い、生徒の取組状況を確認する。 ・生徒の発話内容を中間指導に繋げる。
③中間指導	T: Do you have any questions? (質問を呼びかける)	・生徒の気付きを促す視点での指導 ・既習表現の想起 ・対話の継続のためのポイントの確認
④Small Talk(2回目)	S1: Did you enjoy your weekend? S3: Yes. S1: That's nice. What did you do? S3: I played baseball. S1: Oh You played baseball. At school? S3: Yes. How about you?	・同じ話題でもう一度やり取りを行う (ペアを隣同士から前後に変えるなど、相手を変える)

## (2) Teacher Talk について

村野井(2014)は、「英語教師が教室内で学習者に理解可能なインプットを与える手段として、最も重要なのは教師が教室で英語を使うこと」と述べる。それを踏まえ、Teacher Talk とは「教師が学習者に向かって話す目標言語であり、様々な点で言語習

得を促進するものである」としている。Small Talkの前にTeacher Talkを行う目的について、瀧沢(2022)は「(1)Small Talkの話題を投げかけること、(2)生徒がどの程度その話題について対応できるかを確認すること」と述べている。これらのことから、Teacher Talkは生徒の言語使用を自然に引き出すための手段であり、その後の言語活動へのきっかけを与えるものであると考える。その際、授業者の一方的な発話や、話題の提案・誘導にならないよう留意する必要がある。そのために、授業者が生徒にとって身近なこと(学校生活、行事、流行など)についての話題を提示し、それについて数名の生徒に質問を投げかけたり、応答に対して反応するなど、双方向性のあるTeacher Talkとなるようにする。また、表3の例では、前単元までの既習事項である過去形の使用を想定し、週末にしたことを主な話題として用いている。このように、生徒が既習事項を活かしてやり取りに臨めるよう、生徒にとって身近で、考えや気持ちの表出がしやすい話題の工夫も重要である。

## (3) Small Talk の指導過程について

移行期間指導資料においては、Small Talkの指導過程は「活動→指導→活動」の過程で行うこととしている。1回の活動で終わらず、指導を挟んで2回行うことで、より確実な定着を図り、自分の考えや気持ちを自分の言葉で言えるようになることが期待できる。さらに瀧沢(2022)は、Small Talk中に言えなかった語句や表現をメモさせるための振り返りシートを用いることを提案している。これまでの私の実践でも、Small Talkのためのワークシートを用いてきたが、本研究でもこのようなシートを作成し、生徒が既習事項の確認や、新しく知った表現を蓄積しておくことができるように工夫を行う。

また、移行期間指導資料においては、1つの話題について2コマの授業を使って指導を行うことを示している。同じ話題について繰り返し取り組むことで、表現や会話の継続の仕方の定着を図り、英語を用いたやり取りを主体的に行おうとする生徒の育成に繋げたい。

中間指導については、Small Talk 以外の場面でも必要となるため、後述する。

#### 4 中間指導の充実

国立教育政策研究所が作成した「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する資料」(2020, 以降 指導と評価の一体化資料)において、言語活動間の指導について、図2のように示している。

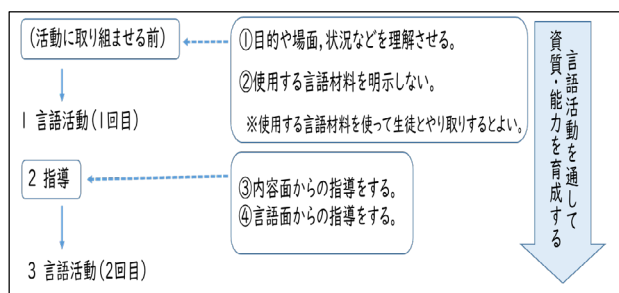


図2 言語活動間の指導について(イメージ)

(出典 国立教育政策研究所, H29)

蓬沢(2022)は、「『伝えたい事があるけれど、うまく伝えられない』『ああ、そうやって英語を使えば伝えられるんだ』ということに生徒自身が気づき、できなかったことをできるようにする」ことが、中間指導を行う意味であり、目的であると述べている。このような言語活動における中間指導は、Small Talk の時はもちろんのこと、授業のあらゆる言語活動の場面で適宜行われるべきものである。表4は、中間指導で留意すべき内容を、指導と評価の一体化資料をもとに筆者がまとめたものである。

表4 中間指導の視点

内容面の指導	言語面の指導
<ul style="list-style-type: none"> <li>目的や場面、状況に応じた発話内容になっているかという視点で行う</li> <li>何を伝えたとよりよくなるか等を含め、生徒の発話を取り上げ全員で考える</li> </ul>	生徒の発言を受け止めながら、以下のことを行う。 <ul style="list-style-type: none"> <li>単語での発話を文にする</li> <li>語順の誤りを訂正する</li> <li>日本語での発話を英語にする</li> </ul>
いずれの指導も、以下の点に留意する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>意図的な机間指導が必須</li> <li>「生徒の発話の何を聞き取るのか」という視点を明確に持つて行う</li> <li>生徒の言葉で授業を創る視点を持つ→「どう思う?」「なぜそう思う?」などの発問を工夫する</li> </ul>	

本研究では、帯活動のSmall Talk や、授業の展開部分で行うやり取りの活動において、こうした

中間指導を積極的に行う。それによって、生徒は自分の表現を振り返ったり、他者の表現したことを自分に照らし合わせたり、他の工夫ができないかを生徒や教師と一緒に考えたりすることができるようになるだろうと考える。このように、中間指導を含めた言語活動の積み重ねにより、言語材料を定着させ、それらを目的や場面、状況に応じて主体的に用いてやり取りを行おうとすることに繋げる。

#### 5 パフォーマンスによる評価

パフォーマンステストは、単元の指導を通じて生徒が身に付けた力を評価するために、単元末に実施する。内容は、単元の授業で学習する内容に基づき、生徒が自身の考えや経験、これまでの学びを活用してやり取りできる話題を示し、やり取りを行うものとする。

パフォーマンステストのルーブリック(評価基準)は、以下のように作成し、事前に生徒に伝え、配布する。目的や場面、状況等に応じて主体的に考えや気持ちをやり取りしているかという視点で、3つの条件に基づき評価する(表5)。テスト実施後には生徒のルーブリックに評価を記入して渡す。生徒が自身の単元を通しての取り組みやテストの内容を振り返り、今後の学習や身に付けた力について見通しを持ち、主体的に学ぶ態度の育成に繋げる。

表5 パフォーマンステストの評価基準

条件1：相手意識を持ち、対話の目的に合った質問をしている。 条件2：自分の考えや好みをよく知ってもらうために、他の人に工夫して伝えている。 条件3：相手の考えを求めたり、話題を広げたり深めたりしながら対話を継続している。		
	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	3つの条件を満たしてやり取りしている。	3つの条件を満たしてやり取りしようとしている。
b	2つの条件を満たしてやり取りしている。	2つの条件を満たしてやり取りしようとしている。
c	bを満たしていない。	bを満たしていない。

## Ⅶ 授業実践

### 1 単元名 Lesson6 Lunch in Chinatown 『ONE WORLD English Course 1』

#### 2 単元の目標

- (1) Which, Why, Who, Whose などを用いた疑問文やその答えの文の意味や構造を理解している。  
日常的な話題について、Which, Why, Who, Whose などを用いて質問したり、相手からの質問に答えたりする技能を身に付けている。 【知識及び技能】
- (2) 相手のことをもっとよく知り、自分のこともよく知ってもらうために、考えや好みなどを工夫して相手に伝え、その内容について会話することができる。 【思考力、判断力、表現力等】
- (3) 相手のことをもっとよく知り、自分のこともよく知ってもらうために、考えや好みなどを工夫して相手に伝え、その内容について会話しようとしている。 【学びに向かう力、人間性等】

#### 3 単元について

##### (1) 教材観

本単元は、中学校学習指導要領(平成29年告示)解説の「(3) 話すこと[やり取り]」に関する内容を取り扱い、「イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする」ことを目的とする。本単元で出てくる疑問詞は、Which, Why, Who, Whose などを取り扱う。それぞれ、使用場面を想定しながらのやり取りを積み重ねることで、定着に繋げる。授業では、生徒達が自分の好きな物やおすすめの物などについて、簡単な文を使いながら自分の考えを伝えたり、相手の考えを知るためにやり取りをする活動を行う。自分の考えを整理しながら伝えたり、相手の考えを聞いて反応したりすることで、相手をより深く知ろうとしたり、自分のことを伝えたりすることに繋がるだろう。

##### (2) 生徒観

本学級で検証前に実施したアンケート調査において「英語が好きか」という質問に「好き」あるいは「どちらかというが好き」と答えた生徒の割合は、全体の74%とやや高かった。また「やり取りの際に、今まで学習した表現などを思い出して使うようにしているか」という質問に対して、97%の生徒が「いつもしている」あるいは「どちらかというとしている」と肯定的に答えた。このことから多くの生徒が英語を学ぶことに意欲的で、やり取りの際にはこれまで学習して身に付けた表現を進んで使おうとしていることがわかる。一方で「英語の授業で難しいと感じるのはどんな時か」という質問には「自分の伝えたい事をどう表現するかわからないとき」「会話が続きず黙ってしまうとき」「単語やフレーズの意味がわからないとき」と答えた生徒が特に多かった。このように、自分の伝えたいことを英語で言い換えることや、会話を続けることに課題があることがわかった。そこで、生徒が既習表現を活かしながら、自分の考えを自分の言葉で伝えられるようになるよう指導を継続していく。

##### (3) 指導観

本単元では、単元末に「話すこと[やり取り]」の活動として、自分のおすすめを相手に伝えたり、相手の好みやおすすめを聞いたりするパフォーマンス評価を行う。授業では、帯活動での基本的な表現や語彙の定着を図る。また、使用した英語表現を全体で共有し確認する場を設ける。生徒が言いたいことを言い換えて聞かせたり、どのように言い換えることができるか生徒自身に考えさせたりすることで、既習表現や知識を活かしてやり取りを行うことができるようにする。また、やり取りの活動においては、今日学習している言語活動や、これまでに学習したことを使って対話できる目的や場面、状況を設定したやり取りの活動を取り入れることで、自らの考えや思いを伝え合うことを楽しむことができるようにしていく。



#### 4 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
「やり取り」 話すこと	<p>【知識】 Which, Why, Who, Whose などを用いた疑問文やその答え方の意味や構造を理解している。</p> <p>【技能】 身の周りのことや日常的な話題について、疑問詞を用いて質問したり、相手の質問に答えたりする技能を身に付けている。</p>	相手のことをもっとよく知り、自分のこともよく知ってもらうために、自分の考えや好みなどを工夫して相手に伝え、その内容について会話することができる。	相手のことをもっとよく知り、自分のこともよく知ってもらうために、考えや好みなどを工夫して相手に伝え、その内容について会話しようとしている。

#### 5 単元の指導と評価の計画(11 時間)

時	◆目標(ねらい) ■主な活動等	評価規準(評価方法)
1	<p>◆単元で学習することを確認し、自己目標を立てる。</p> <p>◆いくつかのものから、どれを選ぶかを、理由とともに伝え合う。</p> <p>■本単元で学習すること、目指すことを確かめ、自己目標を立てる。</p> <p>■お勧めのレストランについて理由とともに伝え合う。(Which / Why を用いた疑問文)</p>	<p>記録に残す評価は行わない。ただし、ねらいに即して生徒の活動状況を見届け、指導に活かすことは毎時行う。活動させるだけにしないよう、十分留意する。</p>
2	<p>◆いくつかの候補から1つ決めるために、工夫して会話する。</p> <p>■教科書の人物が、どのような目的や場面で会話しているかを理解する。</p> <p>■旅行先で食事する場所を決めるために、グループで考えやその理由を伝え合う。</p>	
3	<p>◆単元で学んだ文法事項を自分で使えるように、使う目的や場面とともに振り返る。</p> <p>■ワークやノートブックを用いて、疑問文の使い方や使う目的、場面などを復習する。(Which / Why)</p>	
4	<p>◆友達の欲しいものや、することを尋ねたり答えたりする。</p> <p>■グループメンバーの欲しいものや好みについて、尋ね合う。(Who を用いた疑問文)</p> <p>■レストランで、食べたいデザートを決めるためにやり取りする。</p>	
5	<p>◆友達の欲しいものや、することを尋ねたり答えたりする。</p> <p>■教科書の人物が、どのような目的や場面で会話をしているかを理解する。</p> <p>■いくつかの料理の中から欲しいものを伝え合い、注文する。</p>	
6	<p>◆持ち主がわからないものについて、尋ねたり答えたりする。</p> <p>■いくつかの物(鞆、筆記用具など)の持ち主を見つけ、渡すために会話する。(Whose を用いた疑問文、代名詞を用いた応答)</p>	
7	<p>◆よくすることについて、くわしく伝え合う。(How often do you~?)</p> <p>■ワークやノートブックを用いて、疑問文の使い方や使う目的、場面などを復習する。(Whose / 代名詞)</p>	
8	<p>◆単元で学んだ文法事項を自分で使えるように、使う目的や場面とともに振り返る。</p> <p>■ワークやノートブックを用いて、疑問文の使い方や使う目的、場面などを復習する。(Whose / 代名詞)</p>	
9 本時	<p>◆休みの日に遊びに行く場所を決めるために、互いの考えや好みについてやり取りする。</p> <p>■グループで遊びに出かける場所を決めるため、互いの考えや好みを聞き合ったり、自分の考えや好みを工夫して伝えたりする。</p>	<p>【思判表/態度】(観察)</p> <p>互いの考えや好みなどを、工夫して伝え合っている/伝え合おうとしている。</p>
10	<p>◆パフォーマンステスト</p> <p>■グループ(3人)で、休みの日に遊びに出かける場所やしたいことを決めるため、互いの好みや考えをやり取りする。</p>	<p>【思判表/態度】(パフォーマンス評価)</p> <p>①相手意識を持ち、対話の目的に合った質問をしている/しようとしている。</p> <p>②自分の考えや好みをよく知ってもらうために、他の人に工夫して伝えている/伝えようとしている。</p> <p>③相手の考えを求めたり、話題を広げたり深めたりしながら対話を継続している/しようとしている。</p>
11	単元テスト (筆記, リスニング)	

#### 6 単元末におけるパフォーマンステストとそのルーブリック

(1) パフォーマンステスト「グループで遊びに行く場所を決めよう」

グループで、休日に遊びに行くことになりました。みんなでどこに行くか、何をするかを決めるために、互いの考えや好みを質問しあうなど、工夫して会話しましょう。

(2) ルーブリック (評価基準)

「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」について、単元を通して指導したことを踏まえ、次のルーブリックに沿って評価する。

条件1：相手意識を持ち、対話の目的に合った質問をしている。		
条件2：自分の考えや好みをよく知ってもらうために、他の人に工夫して伝えている。		
条件3：相手の考えを求めたり、話題を広げたり深めたりしながら対話を継続している。		
	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	3つの条件を満たしてやり取りしている。	3つの条件を満たしてやり取りしようとしている。
b	2つの条件を満たしてやり取りしている。	2つの条件を満たしてやり取りしようとしている。
c	bを満たしていない。	bを満たしていない。





7 本時の学習 【9 / 11 時間】



(1) 目標 休みの日に一緒に行く場所を決めるために、互いの好みやおすすめを工夫して伝え合う。

(2) 授業仮説

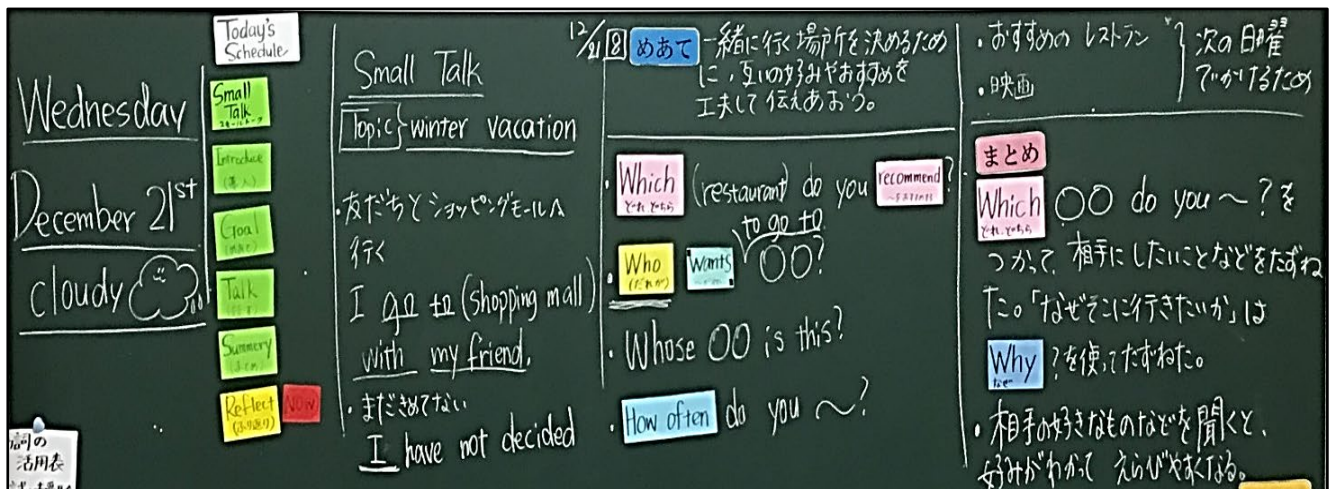
これまでに学習したことや、生徒自身の経験等を活かして表現できる目的や場面、状況等を明示し、やり取りを促すことで、使用する場面を意識しながら、主体的に自分の考えや気持ちを伝えたり、相手の好みや考えを知ろうとするであろう。

(3) 展開

過程	学習活動	○指導上の留意点 ★予想される児童生徒の反応	評価規準 (評価方法)	
導入 10分	1 あいさつ	○教師や近くの席の人と英語で挨拶し、コミュニケーションを取りやすい雰囲気を作る。	 図3 これまでの学習を振り返る様子	
	2 導入 前時までの学習について	○これまでの学習を振り返り、どんなことができるようになったかを考える。 ★おすすめの食べ物を聞いたり、その理由を聞いたりできる。 ★複数の人に対して、好きな物や欲しいものを尋ねたりできる。		
	3 Small Talk 話題：winter vacation (冬休み)	○これまで学習したことを活用しながら、ペアで工夫して会話を続ける。(1分間×2回) ○机間指導を、次の視点で行う。 ①疑問詞やその他の既習表現を活用しているか。 ②相手の考えをより良く知ろうとしているか。		 図4 Small Talkの様子
	4 動画	○教師2人が対話する動画を見る。(週末に一緒に出かけるために、互いの好みを聞き合っている) ★聞きとったことなどをワークシートにメモする。  ○2回目は、2人の会話の中に本単元で学習した疑問詞を含む英文が使われているかに着目して見る。 ★一緒に行く場所やすることを決めるために、お互いの好みやおすすめを伝え合っていたことに気付く。		 図5 動画視聴の様子
展開 30分	5 めあて	【本時のめあて】一緒に行く場所を決めるために、互いの好みやおすすめを工夫して伝え合おう。	 図6 地図を活用しながら、自分の考えを整理する様子	
	6 考えを整理する	○自分が行きたい場所や、友達に勧めたい場所について、ワークシートを使って考えを整理する。(必要に応じて地図を活用する)		

	<p>7 やり取り① (教師と生徒)</p>	<p>○疑問詞など既習表現を意識して使えるよう、発問や生徒とのやり取りの中に意識的に取り入れる。  <b>T: Let's talk with your friends.</b>  <b>You decide (決める) where to go in your holiday.</b>  <b>What food do you like,○○san?</b>  <b>S: Uh... Sushi?</b>  <b>T: So, Which sushi restaurant do you recommend?</b>  <b>S: △△ restaurant?</b>  <b>T: Nice idea. Why do you recommend △△? . . .</b></p>	 <p>図7 ペアでのやり取り</p>  <p>図8 グループでのやり取り</p> <p>【思判表/態度】互いの考えや好みなどを、工夫して伝え合っている/伝え合おうとしている。(観察)</p>
	<p>8 やり取り② (生徒同士, ペア)</p>	<p>○何人かの生徒とやり取りした後、ペアで対話させる。(2分ずつ, 1回目は隣同士, 2回目は前後のペアで)  ○机間指導を, 次の視点で行う。  ①疑問詞やその他の既習表現を活用しているか。  ②相手の考えをより良く知ろうと工夫しているか。  ○机間指導での生徒の発話を中間指導に活かす。</p>	
	<p>9 やり取り③ (グループ内)</p>	<p>○3~4人のグループになって, グループで出かける場所を決めるためにやり取りする。(約3分)  <b>T: Let's make a group of 3 or 4.</b>  <b>Let's decide where to go in your holiday in your group.</b></p> <p>○特に良いやり取りができていたグループについて1組取り上げ, 発表してもらおう。</p>	
<p>終末 10分</p>	<p>10 まとめ</p>	<p>○やり取りをしながら気付いたことや, 工夫できたことなどを, ペア同士で伝え合う。  ○互いの好みに合ったおすすめを伝え合うために工夫したことや, 学んだことなどを, 生徒の言葉を反映させ, 使用した英文を使ってまとめる。</p>	
	<p>【まとめ】 Which ○○ do you ~? を使って, 相手にしたいことなどを尋ね, 「なぜそこに行きたいか」は Why を使って尋ねた。相手の好きな物などを聞くことで, 好みが分かかって選びやすくなる。</p>		
	<p>11 振り返り</p>	<p>○本時で学んだことについて, 今日使った表現を含めて自分の言葉でまとめる。</p>	

(4) 板書



The board is divided into several sections:

- Today's Schedule:** Wednesday, December 21st, cloudy.
- Small Talk:** Topic: winter vacation. Includes phrases like "友だちとショッピングモールに行く" (Going to a shopping mall with friends), "I go to (shopping mall) with my friend.", and "まだ決めてない" (I haven't decided yet) with the sentence "I have not decided".
- Language Points:**
  - Which (restaurant) do you recommend? to go to ○○?
  - Who (何人) Wants ○○?
  - Whose ○○ is this?
  - How often do you ~?
- Summary (まとめ):**
  - Which ○○ do you ~? を使って相手にしたいことなどをたずねた。
  - 「なぜそこに行きたいか」は Why を使ったおすすめ。
  - 相手の好きなものなどを聞くと、好みが分かる(えんぴつ)。
- Notes:**
  - めあて: 一緒に行く場所を決めるために、互いの好みやおすすめを工夫して伝えあおう。
  - おすすめのレストラン: 映画 (次の日曜に観たいため)

## Ⅷ 結果の考察

### 1 作業仮説(1)の検証

「話すこと[やり取り]」の言語活動において、生徒がこれまでの学習や経験、新たに学んだことを活かして表現できる目的や場面、状況等を等を明示し、場に応じたやり取りを促すことで、実際のコミュニケーションの場面を意識しながら、主体的に考えや気持ちを伝え合おうとするであろう。

#### (1) 既習事項や新たな学びを活かすこと

##### ① 手立て

授業中のやり取りの活動において、これまでの学習や生徒自身の経験、またその時間に学習する事項などを使って伝え合う場面を設けた。例えば、一緒に食事するためにおすすめの店やその理由をやり取りする場面では、新出の文法事項である疑問詞の *which* を含む疑問文の他に「Do you ~?」や「What ○○ do you ~?」などの既出の表現を工夫して使用するよう促した。

また、その授業で新たに扱う基本文を使ってやり取りを行う際、「その文を使って質問するときって、どんなとき?(どんなことを聞きたいとき?)」と発問するなど、実際のコミュニケーションの場面を意識してやり取りに臨めるように工夫した。授業の振り返りでは、授業内のやり取りについて、自身や他者の発言を振り返り、どのような表現を使うとより良いやり取りができるか、学習したことは今後どのような場面で使えるかなどを考えることができるような発問の工夫を行った。

##### ② 結果

検証後に行ったアンケートにて「単元の前後で自分が成長したと感ずること」について質問したところ、複数の

生徒が既習事項や知識を活用しながらやり取りしよう意識して取り組んだことが分かった。

表6のア～エの生徒は、対話をする中で分からないことがあった際に、既習事項を活かして対応することができたと回答した。オの生徒の記述からは、既習事項を活用して会話の継続ができるようになったことで、楽しいと感じることが増えたと実感していることがわかった。

表6 自分が成長したと感ずること①

ア	習ったことを思い出してどうにか伝えたこと
イ	今までの習ったことを思い出しながら、会話をしたりしたこと。
ウ	習っていないことも、今まで習ったことである程度伝えられるようになった。
エ	Lesson 6の単元でのスモールトークのときに言い方がわからない英語があっても、今まで習った似てる単語で対応することができるようになった。
オ	習った表現などを使って、前よりも会話が続くようになって、前よりも楽しいと感じることが増えた。

さらに、授業でのやり取りや、振り返りシートからも、生徒がこれまでの学習や経験、新たな学びなどを活かそうとしている様子が見られた。

例えば、第7時の授業では「How often do you ~?」を使って普段よくすることを伝え合うやり取りを行ったが、生徒同士のやり取りの後に、ある生徒から「どのように会話を始めたらいいのかわからない」という質問が出た。それをクラス全体で共有したところ「最初に『暇な時は(放課後には)何をやるの?』と質問することで、スムーズに会話ができ、相手のことも分かるかも知れない」との意見が出た。生徒たちは、これまでに学習した表現を用いて質問できそうだと気づき、1学期に学習した「What do you do (in your free time / after school)?」などを思い出しながらやり取りをする様子が見られた。図9は、生徒Aの第1時と第7時の振り返りシートである。第1時の振り返りでは、授業を通して理解したことを記述するに留まっていたが、第7時には、前述のやり取りの中で新出の表現と既習事項を合わせて活用しながらやり取

りすることで、相手をよりよく知ることができると気付いたことが伺えた。

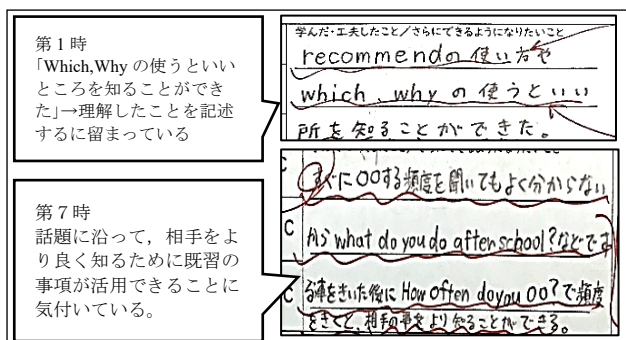


図9 生徒Aの振り返りシートの変容

③ 考察

新たに学んだことに加えて、既習事項を活用することを意識しながらやり取りすることを積み重ねることで、コミュニケーションの目的や場面、状況等を意識し、主体的にやり取りを行うことに繋がったと考える。

一方で、アンケートにて「英語を使ってやり取りするとき、既習表現を思い出して使うようにしているか」と質問したところ、「いつでもしている」「時々はしている」と肯定的に答えた生徒は、検証前も検証後も全体の93%と変わらなかったが、その中の「いつでもしている」と答えた生徒の割合が、41%から27%に減少した(図10)。既習事項や知っていることを活用してやり取りすることを続けたことで、それまで「できている」と感じていた事が「実はまだ足りていないのではないか」と感じるようになったなど、生徒の意識が変化したのではないかと考える。

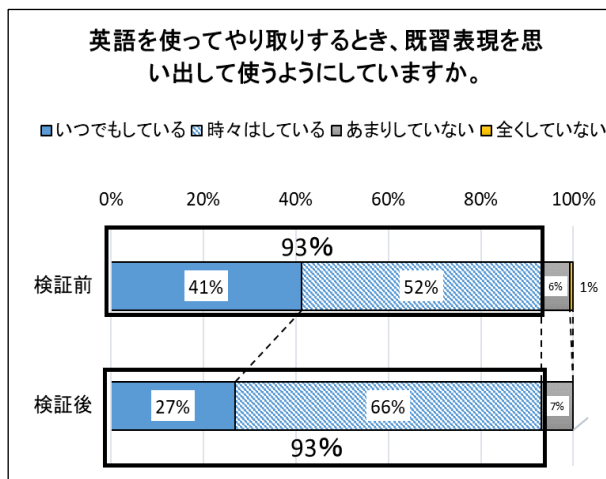


図10 既習表現の活用について

(2) 目的や場面、状況等を明示したやり取り

① 手立て

授業のやり取りの活動では、生徒が主体性を持ってやり取りに臨むことができるような目的や場面、状況等設定した。「週末にすることを決めるために、やり取りしよう」「レストランで、グループの皆の欲しい物を注文をするためにやり取りしよう」など、具体的なやり取りの目的や場面、状況等を意識し、そのためにどのような表現が使えるかを考えながらやり取りに臨むよう促した。場面設定の際も、教師からの一方的な提示にならないよう、本時の授業の内容を踏まえながら生徒自身が考えることができるよう発問を工夫した。

② 結果

検証前と検証後のアンケートで「やり取りの際に特に意識したこと」について質問したところ、「どんな場面でどんな相手に話すのかを考えること」と回答した生徒は、18%から37%へ増加した。また「話題や場面に合った表現を使うこと」と答えた生徒は、48%から59%に増加した(図11)。

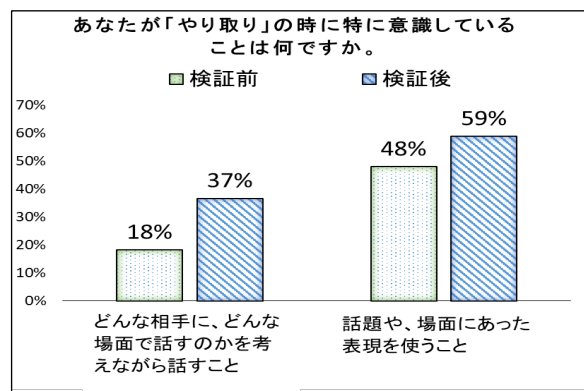


図11 「やり取り」の際に意識したこと

また、生徒の振り返りシートに、コミュニケーションの場面を意識しながら対話に臨んだことが伺える記述が見られた。生徒Bは、単元の第1時の振り返りでは言語を使用する目的や場面、状況等についての具体的な記述が見られなかったが、第9時には、「友達と休日に出かける場所やするこ

とを決める」というやり取りの目的や場面、状況等を意識し、単元で学習したことを用いた記述が見られた(図12)。

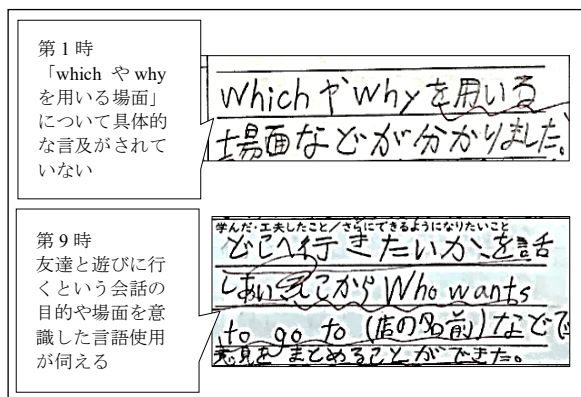


図12 生徒Bの振り返りシートの変容

図13の生徒Cの振り返りシートも同様に、第1時は言語使用の具体的な目的や場面、状況等に関する記述は見られなかったが、第6時には、振り返りの際に言語の使用場面を日常に照らし合わせて考え、使ってみようとする記述が見られた。

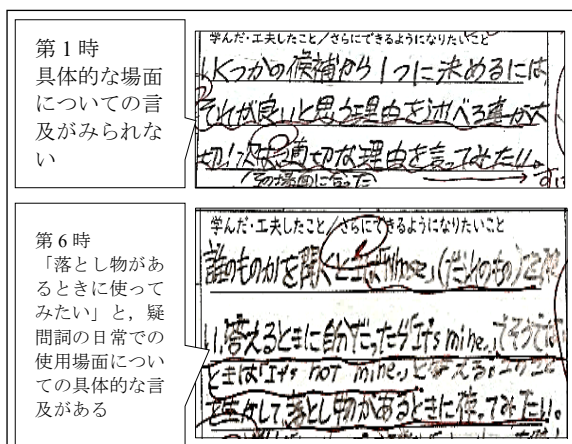


図13 生徒Cの振り返りシートの変容

単元末のパフォーマンステストでは、図14の3つの条件に沿って観察し、評価を行った。グラフは、各条件に達した生徒の割合である。この評価から、「一緒に遊びに行く場所やすることを決めるためにやり取りする」という目的や場面・状況等を踏まえ、相手に考えや好みを質問したり(条件1)、自分の考えを述べたりする(条件2)ことができた生徒は、全体の約6割であった。互いの考えを良く聞き、質問に回答したり、相づちを打ったり、相手の発言を繰り返したりしながら対話を継続する(条件3)ことができた生徒は、全体の96%であった。

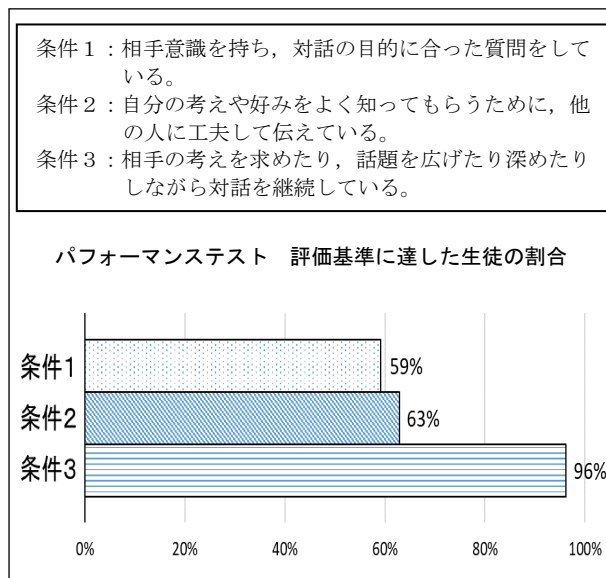


図14 パフォーマンステストの結果

図15は、パフォーマンステストでの生徒D・EとAETの発話内容である。(ア)の場面では、生徒DがAETに対して最初に週末の予定を尋ねてから、遊びに行こうと誘う様子が見られた。また(イ)の場面では、生徒Eが自分の行きたい場所を先に伝えた上で、単元で学習した Who を含む疑問文を使って他の2人にその場所に行きたいかどうかを問いかけて、それに対し生徒Dが「I do.」と応答するなど、目的を意識したやり取りを行う様子が見られた。

※生徒D・生徒E (以下 D,E) AET (以下 T)

D: Are you free next weekend?

T: Yes, I am. Are you?

E: Yes.

T: Oh, let's do something.

D: I want to play with you.  
Where.... you go?

E: I want to go to ●●.  
Who wants to go to ●●?

D: I do.

T: Me too. Let's go.

D: I want to go to game area.

E: Me too.  
(以下省略)

(ア)一緒に出かけるために、週末の都合を尋ねている

(イ)自分の行きたい所を伝えた上で、他の人の考えを聞くために疑問詞を使用し質問を投げかけている

図15 生徒D, Eの発話内容

### ③ 考察

図11のアンケート結果や図12, 13の振り返りシートの記述から、やり取りの際にどんな場面でどんな相手に話すかを考えたり、話題や場

面に合った表現を使うことへの意識が高まったことが伺える。パフォーマンステストにおいても「友達とどこへ行くか、何をするかを決める」という目的を意識し、相手に質問したり、自分の気持ちを伝えたり、相手を誘ったりする表現が見られた。図 15 のやり取りでは、単元で学習した事項を活用して会話を展開する様子も見られた。このことから、単に学習したことを覚えて使うだけでなく、目的や場面、状況等を意識し、これまでの学びや経験などを活用しながら、その場に応じた表現を考えて主体的にやり取りしようとしていることが伺える。

このように、実際のコミュニケーションを意識し、主体的に考えや思いを伝え合うために、目的や場面、状況等に応じたやり取りを積み重ねることは有効であると考えられる。

また、図 14 から、全体の 9 割以上の生徒が、相手の発言に応じた応答や相づちなどをしながら対話を継続することができていることがわかる。

一方で、話題に合った質問を投げかけたり、自分の考えを伝えたりすることにはまだ課題がある生徒がいる。やり取りの様子を観察すると、黙ったまま相手の発言を待つ生徒や、会話をどのように始めたらよいか戸惑う生徒などが複数名いた。生徒が自信を持って自己表現や質問ができるよう、授業で新出事項のインプットを丁寧に行うとともに、既出の表現を思い出して活用することができるやり取りを、工夫して行う必要がある。また、相手意識を持ち、相手をよりよく知ろうとする気持ちや、自分をよりよく知ってもらいたい気持ちを大切にしながら豊かなやり取りができるよう、指導を工夫することも重要であると考えられる。

## 2 作業仮説(2)の検証

「話すこと[やり取り]」の言語活動において、Small Talk や中間指導を充実させることで、言語材料の定着や表現に関する生徒自身の気付きを促し、より主体的に考えや思いを伝え合おうとするであろう。

### (1) Small Talk や中間指導の充実

#### ① 手立て

単元を通して、Small Talk を帯活動として実施した。既習の表現や新出の表現を使ってやり取りができるトピックを示し、やり取りを促すことで、自らの身近なことや関心のあることについてやり取りを楽しみながら、既習事項の定着を図った

Small Talk 前の Teacher Talk では、教師自身が考えや好みなどを伝えたり、関連した質問を生徒に投げかけ、やり取りすることでトピックや使用する言語材料について気付きを促し、生徒が自分で既習事項を活用してやり取りに臨めるよう工夫した。

さらに、やり取りを通しての新たな気付きや、使うことができた表現などは、配布した Small Talk Sheet (図 16) に記入しておくことで、言語の定着を図り、次のやり取りでの活用に繋がられるようにした。

Small Talk Sheet					
【目標】相手の考えをよりよく知るために、工夫して話そう。					
Date (日付)	①Topic (話題)	②Note (書いたことや、先生に質問したこと、新たに書いたことなど…自由にメモしよう!)	③プラス1文	④相づち	⑤質問
6/1	例 rice or bread	・ Which do you like, ● or △? ・ ●●といたいときはどうすればいいか?	○	○	△
/	1	その日の話題 (Topic)	メモ欄(自分が言えたこと、言えなかったこと、学んだことなどを書く)	プラス1文、相づち、質問などができたかを記録する	
/	2				
/	3				

図 16 Small Talk Sheet

授業内で生徒がやり取りを行っている間は表 4 の「中間指導の視点」をもとに机間指導を行い、会話のトピックや場面に合った発話ができているかを聞き取り、中間指導の際には生徒の発話で工夫されていることを共有して、使えそうな場面で使ってみよう促したり、間違えやすい表現などは一緒に考えながらより良い表現に直すなどの指導を行った。

また、中間指導の際「○○とは英語で何と言うのか」という質問が多く挙がっていたが、すぐに教えることはせず、学習したことや使ったことのある表現を使って表したり、

他の言葉で言い換えることができるかを自分で考えたり、思い出すよう促すなど、指導の在り方を工夫した。

## ② 結果

検証後のアンケートにて「Small Talk Sheet にメモしたことを次の会話の時に見直したり、使ったりしたか」と質問したところ、「ほとんど毎回見直し、メモしたことを使った」あるいは「時々は見直したり、使ったりするようにした」と回答した生徒は、全体の84%であった(図17)。

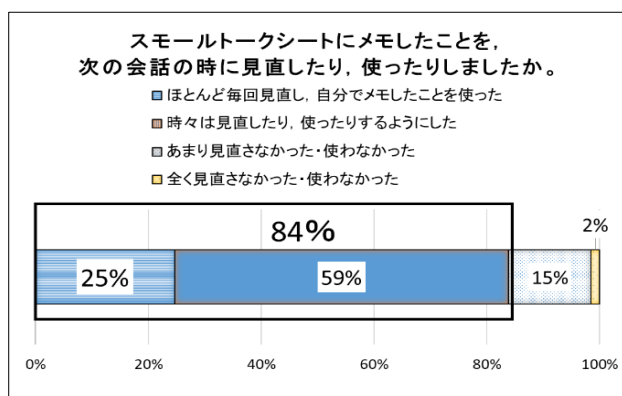


図17 Small Talk Sheet の活用について

また、単元末のアンケートで、Small Talk Sheet の活用方法について質問したところ、最も多かったのは、「学んだことや新しく知ったことをメモした」、次いで多かったのが「できたこと、言えたことをメモした」という意見であった(表7)。

表7 Small Talk Sheet の活用方法

スモールトークシートを、どのように活用しましたか。	
学んだことや新しく知ったことをメモした	75%
できたこと、言えたことをメモした	56%
友達の発言から学んだことをメモした	47%
先生に聞いたことをメモした	45%
自分で調べたことをメモした	44%
相手に聞きたいこと、話したいことなどを事前にメモした	42%
後から質問したいことをメモした	27%
あまり活用できなかった	7%
その他	6%

Small Talk や中間指導を通して、生徒は既習表現を使いながら自分の伝えたい事を伝えようとする様子が徐々に見られるようになった。図18は、生徒FのSmall Talk Sheet の

記述の変容である。生徒Fは、第1回のSmall Talk(話題：レストラン)において、相手におすすめのレストランを尋ねるために使用した表現をメモしている。これを活用し、第6回のSmall Talk でおすすめの場所を質問する表現の際に、第1回で使用したのと同じ英文を、使用する単語を変えて活用したことが記録されていた。



図18 生徒FのSmall Talk Sheet の記述

また、1回目のやり取りを踏まえて中間指導で表現への気付きを促すことをしたうえで2回目のやり取りに臨むことで、生徒が新しく学習する表現や既習事項を使って言いたいことを表現できることに気付き、自ら既習事項を思い出そうとしたり、自分で書いたメモなどを見返しながらやり取りを行ったりと、学習したことを活用してやり取りする意識を持つ生徒の姿が見られた。Small Talk 以外のやり取りの活動の際にも、Small Talk Sheet を見直し、自身でメモした表現を使いながらやり取りに臨む生徒が見られるようになった(図19)。



図19 Small Talk Sheet を活用しながら対話する様子

また、対話に必要な表現を生徒自身で考えたり思い出したりすることを促す指導を積み重ねることで、生徒の意識や行動に変容が見られた。表8は、検証後のアンケートの「自



分が成長したと思うこと」についての質問に対する回答の一部である。

表8 自分が成長したと感ずること②

ア	自分でなんていうかを考えたり、言ったりすることが前よりできるようになった。
イ	わからない英語は必ず調べています。
ウ	わからなかったら調べてその単語を使おうとした。
エ	分からない単語などがあつたときなどは、自分からメモしたり、調べたりできるようになった。
オ	今までの授業で何を習つたかを見返すことを意識するようになった。

③ 考察

多くの生徒が Small Talk や中間指導を通して得た気付きや、使用した言語材料を活用し、自分の考えや思いを伝え合おうとしていた。また、多くの生徒が自らの気付きや成果などをメモするために Small Talk Sheet を活用しており、そこでメモしたことを他のやり取りの場面でも活用している姿が見られた。

中間指導を通して表現の定着や気付きを促す中で、表8のアの生徒のように、自分の表現したいことをどのように表現するかを自分で考えるようになったり、イ～オの生徒のように分からない表現があれば自分で調べたり、メモを参照したりするようになったことが伺えた。これらのことから、Small Talk や中間指導を充実させることで、言語使用や表現への気付きを促し、自分で身に付けた表

現を活用しながら、より主体的に考えや思いを伝え合うことに繋がったと考える。

Ⅹ 成果と課題

1 成果

(1) 既習表現や新たな学びを活用しながら、目的や場面、状況等に応じたやり取りの活動を積み重ねることで、その場に応じた表現を工夫し、主体的に互いの考えをやり取りすることができた。

(2) Small Talk や中間指導を充実させ、基本的な表現の定着を図ったことで、生徒が既習事項を思い出して活用しながらやり取りするようになった。

2 課題

(1) 生徒が「学び・育ちの実感」を持つような効果的な「フィードバック」「振り返り」「個人内評価」などの評価の工夫が必要である。

(2) より相手意識を持った豊かなやり取りができるよう、コミュニケーションの目的を明らかにした課題設定と、よりスムーズな自己表現ややり取りに繋がる帯活動の更なる工夫を行う。

【主な参考・引用文献】

- ・文部科学省(2017)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』
- ・国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2020年)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 外国語】』
- ・中央教育審議会(2016)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』  
<https://www.bunkei.co.jp/kaitei/images/chukyoshin2017.pdf>
- ・文部科学省(2017)『移行期間における指導資料について(中学校外国語科)』  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/04/05/1414476\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/05/1414476_1.pdf)
- ・山田誠志 著(2022)『全国の実践から学ぶ中学校英語教育35のポイント』 日本標準
- ・村野井仁 著(2006)『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 大修館書店
- ・瀧沢広人 著(2022)『中学校英語 指導スキル大全』 明治図書
- ・酒井英樹 著(2021)『特集 目的や場面、状況をどのように設定するか』 三省堂
- 三省堂小学校英語マガジン ACE 4  
[https://tb.sanseido-publ.co.jp/wp-sanseido/wp-content/uploads/2023/01/ACE-No7\\_HP.pdf](https://tb.sanseido-publ.co.jp/wp-sanseido/wp-content/uploads/2023/01/ACE-No7_HP.pdf)
- ・吉田研作(2020)『これからどのような英語教育が求められるのか～言葉で「つながる」授業をつくる～』  
上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム報告書
- ・蓬沢守 著(2022)『中間指導って何?—今からできる中間指導の4つのポイント—』 英語教育11 大修館書店